《 資 料 》

壺屋焼物博物館展示基本設計〈報告書〉平成６年度

壺屋焼物博物館展示基本設計＜報告書＞

平成6年度

那覇市教育委員会
株式会社乃村工藝社

目次

■ 事業計画
壺屋焼物博物館の性格 …… 1
壺屋焼物博物館の事業方針 …… 3
壺屋焼物博物館の事業内容 …… 4

■ 展示計画／全体概要
展示計画の考え方 …… 10
展示ストーリー …… 12
展示の内容と展開 …… 13
展示構成リスト …… 15
ゾーニング及び動線図 …… 24
イメージスケッチ …… 26

■ 展示計画／ゾーン展開
焼物前史／平面図・立面図・断面図 …… 27
焼物前史／ゾーンスケッチ …… 28
焼物前史の展示展開 …… 29
壺屋焼の歴史／平面図 …… 31
壺屋焼の歴史／立面図・断面図 …… 32
壺屋焼の歴史／ゾーンスケッチ …… 33
壺屋焼の歴史の展示展開 …… 34
生活の中の壺屋焼／平面図・立面図 …… 37
生活の中の壺屋焼／立面図 …… 38
生活の中の壺屋焼／ゾーンスケッチ …… 39
生活の中の壺屋焼の展示展開 …… 40
壺屋焼・その特徴／平面図・立面図・断面図 …… 44
壺屋焼・その特徴／平面図 …… 45
壺屋焼・その特徴／立面図・断面図 …… 46
壺屋焼・その特徴／ゾーンスケッチ …… 47
壺屋焼・その特徴／展示展開 …… 48
解説計画の考え方 …… 52

■ 展示計画／企画展示室
平面図・立面図・断面図 …… 54
企画展示室のレイアウト例 …… 55

■ コンピュータシステム計画
博物館における情報システムの必要性 …… 56
収蔵品管理システム …… 57
地域情報提供システム …… 68

■ 館内インフォメーションの考え方
館内インフォメーションの必要性と内容 …… 71

■ 運営計画
運営形態と組織体制 …… 72

■ 今後の課題
今後の課題 …… 73

最近の博物館の動向や、現在の壺屋における現状と課題をふまえた上で、今壺屋ではどのような博物館が求められているのかを、４つの視点から考えます。

1.文化観光の視点

●壺屋にふさわしいテーマ博物館

古くから沖縄陶業の中心地として栄えた壺屋において、その個性豊かな地域性や沖縄独特の美意識を反映させた博物館をめざす。

●那覇市の新しい観光ポイントとしての博物館

那覇市の上位計画「グランドバザール那覇」の主要構成事業として、壺屋地区をより強くアピールし、那覇市に新たな魅力を加える。

●地域振興の拠点としての博物館

壺屋地区のまちづくりや文化活動・商店街活動との密接な連携を図り、那覇市がすすめる『ヤチムンの里づくり』の中核施設と位置づける。

●エコミュージアムとしての博物館

博物館内だけでなく壺屋地区そのものを博物館と位置づける。古い石垣や伝統的な沖縄風家屋、拝所や古井戸などを壺屋固有の歴史的文化遺産と捉え、また周辺工房等でも展示や演示を行い、それらを繋ぐ散策ルートを設定する。

2.地域コミュニティ形成の視点

●生涯学習の機会と場を提供する博物館

市民に学習の機会や場を提供し、継続的な利用がなされるよう、学習情報の提供やセミナー・講座等を開催するなど、生涯学習に対する市民の要求を充足する。

●人と人のコミュニケーションの場としての博物館

窯業関係者と一般生活者の共生する壺屋地区において、作家と市民、また市民相互の交流を図るなど、多様なコミュニケーションの形成を目指す。

●文化財保護の拠点としての博物館

敷地に隣接する『フェーヌカマ』をはじめ、壺屋固有の文化財を保護していくための拠点とし、壺屋の持つ歴史的・文化的重要性を再発掘し、市民共通の精神基盤の形成に寄与する。

3.国際化の視点

●国際的な文化交流を図る博物館

壺屋焼をはじめ多くの影響を受けたアジア諸国の焼物等をも取り込み、魅力ある研究や展示を展開し、その成果をもとに国際的な交流を深める。

●中国・台湾・韓国へ国際的に開かれた博物館

中国・台湾・韓国から沖縄への観光客は今後さらに増加するものと思われる。それら海外からの観光客を対象とした解説計画やサービスを整え、グローバルな視野に立って情報を発信する博物館である。

4.陶磁史研究の視点

●焼物の『シンクタンク』としての博物館

沖縄・壺屋の焼物に関する資料を収集・保管し、調査・研究を深め、専門的な情報を蓄積することで地域振興にも寄与できる『シンクタンク』機能を目指す。

●専門家を育成する博物館

館独自の調査・研究を反映させた企画展示や各種講座を通し、壺屋焼きの伝統を伝え、優れた技法の保存・継承を図る。

●新たな生活文化を創造する博物館

一般市民を研究や館の活動に加えるなど、市民自らが参加し、体験していくことで、より豊かな生活文化を創造していくための拠点とする。

壺屋焼物博物館が将来に向けてどのような活動を行っていくのかを、利用対象・フィールド・機能など、様々な角度から検討します。

壺屋焼物博物館の事業方針 03

●集客を重視する博物館

沖縄・那覇市の新しい観光ポイントとして、また、壺屋地区へより多くの人々を誘致するための拠点としての施設を目指す。

「焼物」にテーマを絞り、沖縄の美意識「琉球の富」に訴える博物館とする。

●普及活動を重視する博物館

多くの人に足を運んでもらう博物館とするために、学習交流活動やイベント活動などの普及活動にも力を注ぐものとする。

博物館のリピーターの多くが、企画展示（特別展示）や学習講座への参加による来館であることを考慮し、壺屋焼物博物館でもこうした普及活動を重視していく。

また、ニューメディアを活用した普及活動なども取り入れるものとする。

●館外に広がる活動の場

壺屋地区内の文化財や歴史的な施設、また、周辺の陶芸店や工房などを活用した事業展開を図る。

壺屋焼物博物館の建物内だけが博物館活動の場ではない、という考え方に立ち、館の外に積極的に飛びだしていく活動を目指す。

●人材育成の循環システム

展示や普及活動を入口に壺屋焼物博物館と接した利用者が、それぞれの年齢や興味の対象、学習の深度などに応じて、初歩的なレベルから専門的な学習まで次第に高度な段階へ進むことができる事業活動を用意する。

学習交流活動における多彩なプログラムの用意とともに、学習プログラムの段階を経た人たちの学習指導員や解説員等への登用、さらに調査研究への参加など、館の活動を通して自由に学び、新しい課題を発見し、その成果を身に着け、さらにそれを還元していくという人材育成の循環システムの構築を目指す。

●調査・研究活動に積極的に取り組む博物館

陶磁器の調査・研究を行い、壺屋焼のバックグラウンドを明らかにすることによって、将来へ向けてのデザイン性や芸術性などの可能性を広げる。

壺屋焼物博物館は、他の機関や周辺の関連施設と館の事業の内容を分担することで相乗効果を狙うとともに、街ぐるみの活動を図ります。

壺屋焼物博物館の事業内容 04

●・・・活動の中心　○・・・活動に積極的に参加　△・・・活動に協力　組合＝壺屋陶器事業共同組合

事業内容		壺屋焼物博物館	伝統工芸館	観光・商工課	都市デザイン室	周辺商店	周辺工房	町民会館・組合	市民ボランティア
基本事業	調査研究活動	●							
	収集・保存活動	●							
	常設展示活動	●（歴　史）	●（現　代）		△	○	○		
	体験学習	△	○			○	△		△
	情報提供活動	●	●	●		△	△	△	△
集客事業	文化学習交流活動	●	○	△		△	△	○	△
	企画展示活動	●	●	△		△	△	△	△
	イベント・催事活動	△	○	●		○	○	△	△
	関連施設との連携活動	○	○	●	△	△			
広報事業	対外ＰＲ活動	○	●	●		○	△		
	マスメディアや企業とのタイアップ活動	△	●	●		△	△		
	旅行代理店への対応活動	△	●	●					
サービス事業	エコミュージアム活動	●			○	△	○	○	○
	利用者の多様性に応じたサービス活動	●			○	○	△		△
	飲食サービス活動	△				●			
	ミュージアムショップ活動	△	○				○	●	

基本事業

●調査研究活動

○文化財の復元と調査・研究
・フェーヌ窯活用にむけての調査・研究
・湧田窯復元にむけての調査・研究　等
○荒焼・上焼の調査・研究
・発掘資料の分析・研究
・製法・技法等の調査・研究　等
○壺屋地区の郷土史の調査・研究
○壺屋地区の民俗・文化の調査・研究
○壺屋焼物博物館における学習プログラムの調査・研究
○沖縄の焼物全般に関する調査・研究　等

●収集・保存活動

○収集活動
・範囲：壺屋焼、沖縄の焼物、及びそれらに影響を与えた焼物等に関するもの
・対象：実物資料、写真、フィルム、テープ、ディスク等の映像、図書、雑誌　等
・収集方法：購入、受領、受託、制作、借入れ、交換　等

○保存活動
・保存のための条件整備
（収蔵庫の温度、湿度、防虫、紫外線による褪色防止　等）
・資料の保管・管理 —— データベースの構築
（コンピュータの導入、他館とのネットワーク化等）

●常設展示活動

○メイン展示
・壺屋焼の魅力を、実物、模型、映像等を駆使して紹介
○屋外展示
①敷地内・・・イベント広場、シンボルモニュメント、西の宮　等
②敷地外・・・フェーヌ窯　等
③散策ルート内展示・・・文化財や景観の案内サイン・解説、周辺工房での個別展示　等
○移動展示
・パッケージ化した展示ユニットを公立の施設（学校など）に運びこんで展示する。

●体験学習

○周辺工房での講座との連携により、市民の壺屋焼への理解と関心を深めるための体験学習ができる機会を提供する。
○伝統工芸館において行っている陶芸講座を紹介し、壺屋焼物博物館においても申込み受付を行うなど連携活動を行う。

●情報提供活動

○収蔵資料情報システムの構築
○壺屋焼に関する情報提供
○インフォメーションサービスシステムの構築
・散策ルート内展示物の案内情報
・国内の焼物に関する情報
・世界の焼物に関する情報
・壺屋のイベント情報
・沖縄の観光情報　等
○各種検索装置の更新・追加
○他施設・他機関とのネットワークづくり
○伝統工芸館の体験工房の情報
○周辺飲食物販店の情報

集客事業

●文化学習交流活動
○各種セミナー、講演会、シンポジウム等の開催
○ＣＡＴＶ、パソコン通信等ニューメディアによる学習講座
○出版活動
○ボランティアの育成と活用
○学校教育との連携　等

●企画展示活動
○自主企画による展示
○他の機関との共催による展示
○他機関による企画展示（巡回展示）の受入れ
○市民へのスペースの貸出し　等

●イベント・催事活動
○壺屋地区内スタンプラリー
○各種コンサート（場の提供）
○パフォーマンス、演劇（場の提供）
○インスタレーション（場の提供）
○観光・商工課とのタイ・アップ活動
（マチグワーフェスティバル　等）
○那覇市の記念事業・季節のテーマに沿った催事
（場の提供）　等

●関連施設との連携活動
○関連する博物館との共同イベントの企画・運営
○観光文化関連施設との共通カードの発行
○壺屋焼物博物館を核とした壺屋地区散策コースの設定（工房見学・関連展示など）　等

広報事業

●対外ＰＲ活動
○広報デスクの設置
・対外ＰＲ計画の作成など、ＰＲ活動を統括しスケジュール管理する専門部署
○効果的なメディアの選択
・新聞各紙
・専門誌
・週刊誌・月刊誌
・イベント情報誌
・文化関係のライター
・テレビ・ラジオ　等
○メディアへの提供資料の作成
・定期的なニュースリリース
・イベントに合わせたポスターの作成
・チラシ等の作成・配付　等

●マスメディアや企業とのタイアップ活動
○マスメディアとのタイアップ活動
○企業・団体のメセナ活動の取り込み
○市場・商店街とのタイアップ活動　等

●旅行代理店への対応活動
（商工・観光課への協力要請）
○新たな観光ルートの開発と設定
○観光用パンフレットの制作・配付　等

サービス事業

●エコミュージアム活動
○周辺工房との連携活動
○周辺工房や個人宅などへの展示ケースの貸出し・設置
○環境との調和のとれた分かりやすいサインの設置
○ルートマップの配付　等

●利用者の多様性に応じたサービス活動
（施設面）
○クローク・コインロッカー等の設置
○授乳室の設置
○高齢者・身障者対策　等
（運営面）
○夜間開館の検討（季節・曜日限定）　等

●飲食サービス活動
（近隣の飲食店での活動）
○沖縄の食生活と共に発達した壺屋焼を、実際に手に触れ、使用させることでのアピール
○地元住民への憩いの場の提供　等

●ミュージアムショップ活動
（近隣販売店での活動）
○オリジナルグッズの開発・販売への協力
○他施設との共同商品開発・販売への協力
○焼物に関する図書の出版・販売への協力
○フィルムやテレホンカード等の一般的な商品の販売
等

●『ヤチムンの里づくり』のコアとして
壺屋焼の全体像を把握できる展示 ―――→ 分かりやすく立体的なテーマ構成

壺屋焼を語るためには、時代的変遷、人々の生活との結びつき、製品自体の多彩な種類や特徴、技法など多くの側面にふれる必要がある。専門的な情報に偏ることなく、こうした多様な情報を、分かりやすくテーマ立てし、立体的に構成してその全体像を紹介する。

●壺屋焼を通して地域の文化を見直し活用する展示 ―――→ 地域との連携、地域への広がりを意識する

地域独自のテーマである壺屋焼を通して地域の歴史・文化を再確認し活用することを目指す。展示においても、散策ルートや地域の文化財、サテライトとしての地域の工房の公開や展示の紹介など、地域への誘いを積極的に取り入れていく。

●壺屋焼のポテンシャル（潜在力）を示す
刺激にあふれた展示 ―――→ 壺屋焼の美（すばらしさ）を堪能できる場の創出

柳宗悦に「日本中の伝統的な窯場としては第一に推すべきもの」といわれ、民芸運動にも影響を与えた壺屋焼の持つ魅力を存分に堪能できるよう配慮する。優品についてはその美をそのままに伝え、一般来館者とともに現代の作り手にも刺激となることを期待する。

●観光客など、予備知識のない来館者も引きつけ
楽しみながら理解を深める展示 ―――→ 見る・聞く・触れるプラス空間全体を情報化した体感性あふれる展開

那覇市の新しい観光ポイントとなる博物館として、ストーリー性を加味し、空間自体から情報発信していく話題性のある展示演出にも留意する。見る、聞くプラスアルファの体感性のある要素で、楽しみながら理解を促す展示を工夫する。

展示計画の考え方 11
空間の考え方

●ゾーンごとに表情を変えるドラマチックな空間づくり

・1階 ―― 『時代の小道』を抜けて昭和10年代の民家の裏庭に至るストーリー性のある展開

1階展示室で展開されるテーマ「歴史」と「生活」を空間的にも表現していく。歴史の軸に沿った動線をスージーグワーに見立て、導入部と民家再現の場を結ぶ構成とする。細い小道と広場的な空間の組み合わせにより空間的な変化を演出し、さらにそこには、現代から太古へとタイムスリップした来館者が、時代を通り抜けて昭和10年代の民家の裏庭に出るというドラマ性が組み込まれている。

・吹き抜け―民家の再現がつなぐ1階から2階への視点の変化とテーマの変化

1階と2階を結ぶ吹き抜け空間を効果的に活用し、屋根部も含めた民家の再現を行う。階段を登る視点の変化とともに、民家内部の生活の視点から、シーサーや瓦を含めた「壺屋焼の特徴」へとテーマも変化する。

・2階 ―― 焼物が主役となる静的な空間演出

壺屋焼そのものをじっくりと鑑賞できるギャラリー的な空間とし、個々の焼物が主役となる静的な空間づくりを目指す。

●壺屋焼の美が映える空間づくり

・壺屋焼独特の色彩・質感をありのままに見せる

壺屋焼独特の色彩や質感、形体の特異性等を最大限に引き出し、おおらかで温かみのあるその“美”をありのままに感じることができるよう、ステージやケースなど展示什器の素材や質感、色彩、そして照明計画にも意を払った空間づくりを目指す。

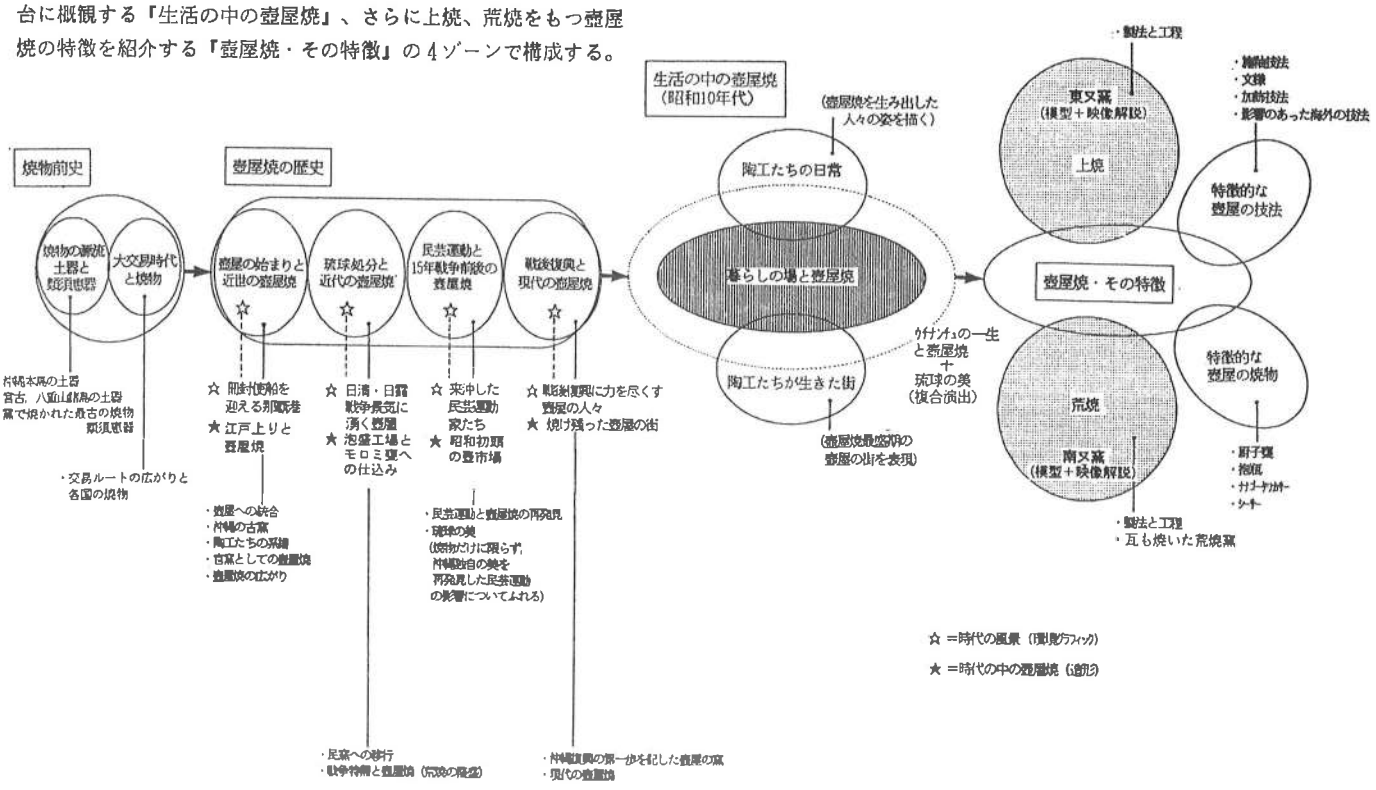
●沖縄の空気を感じさせる空間づくり

・素材と色彩で沖縄らしさを表現する

民芸運動の端緒ともなった壺屋焼とともに、沖縄には『琉球の富』と称された優れた美術工芸の伝統がある。染色、織物、漆芸など、沖縄の独特の自然風土と歴史的個性のなかで生み出されてきた美術工芸のモチーフを空間構成に反映し、その素材や色彩を活かして、沖縄の空気を感じさせる空間づくりを試みる。

展示ストーリー 12

歴史という時間軸に沿ったテーマ展開と、生活という空間軸の設定によるテーマ展開で構成する。焼物の源としての土器から大交易時代の海外の焼物との接触までの『焼物前史』、壺屋統合以降陶芸三人展頃までの壺屋焼の歩みをエポックとなる事象とともに四つの時代に区分してたどる『壺屋焼の歴史』、そして、沖縄の人々と壺屋焼の深い繋がりを、民芸運動で壺屋焼が再評価された昭和10年代を舞台に概観する『生活の中の壺屋焼』、さらに上焼、荒焼をもつ壺屋焼の特徴を紹介する『壺屋焼・その特徴』の4ゾーンで構成する。



ゾーン	コーナー	展示内容	特徴となる展示展開
焼物前史	焼物の源流 土器と類須恵器	焼物の源流としての土器及び沖縄の焼物の原形態である類須恵器について紹介する。九州の影響の強い沖縄諸島の土器、台湾やフィリピン等南方の影響が強い宮古・八重山諸島の土器、また、土器と同じ焼成法で焼かれるパナリ焼についてもふれる。	・各時代、各地域の特徴を示す見学用の実物ケース展示と、来館者が実際に手を触れられる『レプリカ』による展示を用意する。
	大交易時代と焼物	大交易時代の交易ルートや交易品についてその特徴を解説、活発な諸外国との交流に伴い沖縄にもたらされたさまざまな焼物を紹介し、その後の沖縄の焼物に与えた影響を示唆する。	・交易ルートの広がりとそれに伴う各国の焼物との接触の広がりを示すため、ルートを表現するグラフィックと解説、沖縄に渡ってきた焼物実物を組み合わせて立体的に展示する。
壺屋焼の歴史	――	壺屋焼の歴史を「壺屋の始まりと近世の壺屋焼」「琉球処分と近代の壺屋焼」「民芸運動と15年戦争前後の壺屋焼」「戦後復興と現代の壺屋焼」の四つの時代に大きく分類し、時代ごとのエポックと壺屋焼にかかわる人々など、関連情報を絡めながら今日に至る壺屋焼の道のりを紹介する。	・各時代ごとの壺屋焼を語るにふさわしい特徴的な事項を取り上げ、『時代の中の壺屋焼』の存在を示すミニジオラマをコーナの導入として据え、『時代の風景』を捉えた環境演出性の高い大型のグラフィック（環境グラフィック）をコーナーの背景として、来館者の興味を引きつける役割を果たす。
	壺屋の始まりと 近世の壺屋焼	17世紀末、三つの窯（知花、宝口、湧田）の統合によって壺屋焼が誕生した背景、官窯としての性格などその特徴、壺屋焼の振興に尽くした陶工たちなど関連情報を伝える。三つの窯以外の沖縄の古窯についてもふれる。	・「冊封使船入港で賑わう那覇港の図」を環境グラフィックとして展開する。 ・泡盛を献上品として携えた「江戸上り」をミニジオラマで再現する。
	琉球処分と 近代の壺屋焼	琉球処分により沖縄の日本への帰属が確定したことで、壺屋焼にも変化の波が押し寄せる。民窯への移行、陶器商人たちの来島と上焼への影響、日清・日露戦争特需と荒焼など、時代の流れの中での壺屋焼の足跡をたどる。	・「日清・日露戦争で湧く壺屋」の町の様子を当時の風俗を交え環境グラフィックで展開。 ・繁栄を極めた泡盛工場の、モロミ甕の並ぶ壮観をミニジオラマで再現する。
	民芸運動と15年戦争 前後の壺屋焼	壺屋焼再評価のきっかけとなった民芸運動に焦点をあて、柳宗悦、浜田庄司ら沖縄にやってきた民芸運動家たちの壺屋焼についての評価を紹介する。また、壺屋焼を中心としながら、工芸王国沖縄に生まれた、漆器、染織など琉球の珠玉の美についても概観する。	・柳宗悦、浜田庄司、バーナード・リーチなど「来沖した民芸運動家たち」のコラージュを環境グラフィックで表現。 ・所狭しと並べられた壺と買い求める人たちであふれ、壺屋焼が日常的に利用されていたことを示す「壺市場」の景観をミニジオラマで再現する。
	戦後復興と 現代の壺屋焼	いち早く窯に煙を立ちのぼらせ、日用食器、瓦などを焼いて、沖縄の戦後復興の第一歩を記した壺屋の町について語る。また、沖縄の陶芸界をリードし、新しい時代を開き、現代につながる陶芸三人展の時代についても紹介する。	・「戦後の復興に力を尽くす壺屋の人々」の活き活きとした表情を環境グラフィックに写し取る。 ・焦土の中で焼け残った壺屋の町を、ミニジオラマで象徴的に再現する。

ゾーン	コーナー	展示内容	特徴となる展示展開
生活の中の壺屋焼	暮らしの場と壺屋焼	沖縄の人たちの暮らしに密着した、生活の道具としての壺屋焼について、上焼、荒焼とも庶民の生活に数多く使用されていた昭和10年代を舞台に紹介する。同時に、日常の場と対比する形でハレの場で使用された壺屋焼についても紹介する。ここでは、沖縄の人々の生活を飾った各種の工芸品を「琉球の美」として捉え、これも情報として折り込んでいく。 また、壺屋焼を生み出した陶工たちの日常の生活や陶工たちが生きた当時の壺屋の町について、さらにスージーグワーネットワークについても紹介する。	・那覇の民家を、台所を中心として原寸再現し、日常使われていた壺屋焼の数々を置き、当時の日常の暮らしの場と壺屋焼の関係が直接把握できるよう環境構成する。 ・この環境構成の場を利用し、「ウチナンチュの一生と壺屋焼」として、人生のエポックを彩った壺屋焼について、実物に造形、映像、音響、照明効果を加えたストーリー性豊かな複合演出シアターを展開する。なお、琉球の美としての工芸品も交えたストーリー展開を試みる。 ・スージーグワーネットワークの紹介では、自由に持ち帰れるルートマップを用意し、町歩きに活用してもらう。
壺屋焼・その特徴	上焼	上焼の特徴、製法と工程について紹介する。 東ヌ窯をモデルとし、上焼に特徴的な連房式の登り窯の構造と焼成を紹介、製作過程を三段階に分けて製法、原材料、道具などについて解説する。	・東ヌ窯の断面模型と合わせ、コンピュータグラフィックスを使い、窯の内部構造、焼物の並べ方、焼成過程、火入れと火の回り方などについて、窯の内部からの視点、クローズアップ等、さまざまな視点からの映像を作成し、興味深く、分かりやすい解説を図る。 ・製法と工程の紹介では、各段階の焼物のサンプルと、使用する道具を組み合わせ、映像・グラフィック解説とともに示す。
	荒焼	荒焼の特徴、製法と工程について紹介する。 南ヌ窯をモデルとし、荒焼に特徴的な単房、トンネル式の登り窯の構造と焼成を紹介、製作過程を二段階に分けて製法、原材料、道具などについて解説する。	・南ヌ窯の断面模型と合わせ、コンピュータグラフィックスを使い、窯の内部構造、荒焼独特の焼物の並べ方、火入れの仕方等を紹介、火の回り方等についても、窯の内部からの視点、クローズアップ等、多様な視点での映像を作成し、興味深く、分かりやすい解説を図る。 ・製法と工程の紹介では、各段階の焼物のサンプルと、使用する道具を組み合わせ、映像・グラフィック解説とともに示す。
	特徴的な壺屋の技法	壺屋焼の特徴的な技法について、これらの技法に影響のあった海外の焼物の装飾、加工の技法などについても触れながら紹介する。	・それぞれの技法が特徴的に読み取れる実物中心の展示とし、優品の持つ美しさが十分生きるようなギャラリー的な展開とする。
	特徴的な壺屋の焼物	厨子甕、シーサー、抱瓶、カラカラなど、沖縄独自の焼物について、その特徴、由来などを紹介する。海外からの影響についてもふれる。	・それぞれ独自の特徴を有する、製品自体の持つ面白さが十分生きるよう、実物展示を中心としたギャラリー的な展開とする。

展示構成リスト 15

ゾーン	コーナー	項目	展示内容	原形態	展示処理	展示形式	備考
焼物前史	――	――	名称	タイトル文字	グラフィック処理	ゾーンパネル	サイン機能を果たす
	焼物の源流 土器と類須恵器	――	焼物の源流土器と類須恵器	原稿・図版	グラフィック処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す
		沖縄本島の土器	沖縄本島の土器―特色と変遷	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			貝塚時代　前期の土器	――	実物	ケース	
				土器	レプリカ	ステージ	触れられる展示用
			貝塚時代　後期の土器	――	実物	ケース	
				土器	レプリカ	ステージ	触れられる展示用
		宮古、八重山諸島の土器	宮古、八重山諸島の土器―特色と変遷	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			宮古、八重山諸島の土器	――	実物	ケース	
				土器	レプリカ	ステージ	触れられる展示用
			パナリ焼	――	実物	ケース	
				パナリ焼	レプリカ	ステージ	触れられる展示用
		窯で焼かれた最古の焼物 類須恵器	類須恵器―製法と特色	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			類須恵器	――	実物	ケース	
				類須恵器	レプリカ	ステージ	触れられる展示用
			亀焼古窯の発見 （亀焼古窯の概要と意義）	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
	大交易時代と焼物	――	大交易時代と焼物	原稿・図版	グラフィック処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す
		交易ルートの広がりと 各国の焼物	琉球の対外貿易と輸入された陶磁器 中国との進貢貿易ルート 南方貿易ルート 対日貿易ルート 朝鮮貿易ルート	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	

展示構成リスト 16

ゾーン	コーナー	項目	展示内容	原形態	展示処理	展示形式	備考
			中国の青磁、白磁 南蛮がめ　　等	――	実物	ケース	
壺屋焼の歴史	――	――	名称 壺屋焼の歴史（焼物前史含む） 日本の歴史 琉球の歴史	タイトル文字 年表・図版	グラフィック処理 グラフィック処理	ゾーンパネル	サイン機能を果たす ビジュアル総合年表を含む
	壺屋の始まりと 近世の壺屋焼	――	壺屋の始まりと近世の壺屋焼	原稿・図版	グラフィック処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す。日本琉球、壺屋焼比較年表含む
		時代の風景①	冊封使船を迎える那覇港	図版	グラフィック処理	環境グラフィック	
		時代の中の壺屋焼①	江戸上りと壺屋焼	調査資料	造形処理	ミニジオラマ	
			「江戸上りと壺屋焼」解説	原稿	グラフィック処理	キャプションパネル	
		壺屋への統合	島内産業振興と陶器生産 ・壺屋統合の背景を語る	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			統合された３つの窯 ―知花窯、宝口窯、沖田窯 ・それぞれの特徴と影響	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			知花焼	――	実物	ケース	
			沖田焼	――	実物		
		沖縄の古窯	壺屋統合窯以外の窯の概要 ・古窯分布地図	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			作場焼	――	実物	ケース	
			喜名焼	――	実物		
			古我知焼	――	実物		
			八重山焼	――	実物		
		陶工たちの系譜	招かれた３人の朝鮮陶工・ 一六、一官、三官 ・沖縄最初の陶工～一六	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	

ゾーン	コーナー	項目	展示内容	原形態	展示処理	展示形式	備考
			平田典通 ・薬種、白土の採取調査、中国への焼物留学　等 平田典寛 仲宗根嘉元 仲村渠致元 ・八重山への焼物伝授、白焼物の献上と普及、窯構造の改良　等	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			伝仲村渠致元作の焼物	調査資料	レプリカ	ケース	線彫呉須差魚文皿（沖縄県立博物館所蔵）
		官窯としての壺屋焼	琉球王府による管理と公的生産システム	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
		壺屋焼の広がり	伊達家江戸屋敷で発見された壺屋焼 八丈島、小笠原で発見された壺屋焼	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			各地で発見された壺屋焼 ・荒焼クワカサー（汐留貨物停車場跡地出土） ・荒焼水甕（八丈島）　等	——	実物	ケース	
	琉球処分と近代の壺屋焼	——	琉球処分と近代の壺屋焼	原稿・図版	グラフィック処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す。日本琉球、壺屋焼比較年表含む
		時代の風景②	日清・日露戦争景気に湧く壺屋	図版	グラフィック処理	環境グラフィック	
		時代の中の壺屋焼②	泡盛工場とモロミ甕への仕込み	調査資料	造形処理	ミニジオラマ	
			「泡盛工場とモロミ甕への仕込み」解説	原稿	グラフィック処理	キャプションパネル	
		民窯への移行	陶磁器商人の来沖 ・本土からの焼物の移入 ・上焼技法の変化	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
		戦争特需と壺屋焼	荒焼の隆盛　・泡盛の一斗甕	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			モロミ甕、酒甕、徳利　等	——	実物	ケース	

ゾーン	コーナー	項目	展示内容	原形態	展示処理	展示形式	備考
	民芸運動と15年戦争前後の壺屋焼	——	民芸運動と15年戦争前後の壺屋焼	原稿・図版	グラフィック処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す。日本琉球、壺屋焼比較年表含む
		時代の風景③	来沖した民芸運動家たち（柳宗悦、浜田庄司、バーナード・リーチ、河井寛次郎　等）	図版	グラフィック処理	環境グラフィック	
		時代の中の壺屋焼③	昭和初頭の壺市場	調査資料	造形処理	ミニジオラマ	
			「昭和初頭の壺市場」解説	原稿	グラフィック処理	キャプションパネル	
		民芸運動と壺屋焼の再発見	民芸運動と見直される上焼	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			柳宗悦と壺屋焼 河井寛次郎、バーナード・リーチ、浜田庄司等と壺屋焼	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			浜田庄司の作品 バーナード・リーチ の作品　等	陶器	実物orレプリカ	ケース	
		琉球の美	民芸運動の影響 ・壺屋焼の美 ・漆器の美 ・織物（紅型、絣）の美　等	原稿・写真	映像処理	映像モニター	
	戦後復興と現代の壺屋焼	——	戦後復興と現代の壺屋焼	原稿・図版	グラフィック処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す。日本琉球、壺屋焼比較年表含む
		時代の風景④	戦後復興に力を尽くす壺屋の人々	図版	グラフィック処理	環境グラフィック	
		時代の中の壺屋焼④	焼け残った壺屋の街	調査資料	造形処理	ミニジオラマ	陶芸作家へ依頼も考えられる
			「焼け残った壺屋の街」解説	原稿	グラフィック処理	キャプションパネル	
		沖縄復興の第一歩を記した壺屋の窯	壺屋復興の足跡 ・日用食器作り ・瓦作り	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			戦後復興時代の焼物	——	実物	ケース	資料未確認
		現代の壺屋焼	陶芸三人展の時代 ・小橋川永昌と作品	原稿・写真	グラフィック処理	解説パネル	

ゾーン	コーナー	項目	展示内容	原形態	展示処理	展示形式	備考
			・金城次郎と作品 ・新垣栄三郎と作品				
			小橋川永昌の作品	——	実物	ケース	
			金城次郎の作品	——	実物		
			新垣栄三郎の作品	——	実物		
生活の中の壺屋焼	——	——	名称	ﾀｲﾄﾙ文字	ｸﾞﾗﾌｨｯｸ処理	ゾーンパネル	サイン機能を果たす
	暮らしの場と壺屋焼	——	暮らしの場と壺屋焼	原稿・図版	ｸﾞﾗﾌｨｯｸ処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す
			壺屋焼が使われた場 ― 台所	調査資料	造作処理	環境構成 （環境再現＋実物）	再現範囲の確定が必要
			日常使われた壺屋焼 アンダガーミ、サキガーミ、スーチキガミ、ミジガーミ、ワンブー、マカイ、サーク、トックイ、タワカサー、アンビン、チューカー、カラカラ ミジクブサー　等	——	実物		
			「日常使われた壺屋焼」解説	原稿・写真	映像処理	映像モニター	
			ウチナンチューの一生と壺屋焼 （琉球の美を含む）	調査資料	映像処理 造形処理 ﾒｶﾆｯｸ処理	複合演出シアター	環境構成の場を利用し、実物に映像・音響・照明効果を加え複合的に演出する
		陶工たちの日常	初起こしとルート カーと陶工たち 焼物ができるまでと信仰 焼物を焼く人々　等	調査資料	映像処理	映像検索装置	
		陶工たちが生きた街	最盛期の壺屋の街 スージーグワーネットワーク図	原稿・写真 ・図版	ｸﾞﾗﾌｨｯｸ処理	解説パネル ＋ルートマップ	
			スージーグワーネットワーク ・祭りルート ・景観ルート ・やちむんルート　等	原稿・写真	映像処理	映像検索装置	

ゾーン	コーナー	項目	展示内容	原形態	展示処理	展示形式	備考
壺屋焼・その特徴	——	——	名称	ﾀｲﾄﾙ文字	ｸﾞﾗﾌｨｯｸ処理	ゾーンパネル	サイン機能を果たす
	上焼	上焼の製法と工程	上焼	原稿・図版	ｸﾞﾗﾌｨｯｸ処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す
			東ヌ窯	調査資料	造形処理 映像処理	ファンタビュー （断面模型＋映像）	断面模型とＣＧ映像を組合せ窯の内部構造、焼物の並べ方や焼成過程等を解説
			上焼窯（連房式）の構造	原稿・図版	ｸﾞﾗﾌｨｯｸ処理	解説パネル	
			上焼の製法と工程 ・製法と工程①―成土～成形 ・製法と工程②―施釉～窯入れ ・製法と工程③―絵付～仕上げ	調査資料	映像処理	映像検索装置	
			製法と工程①―成土～成形 ・原土採掘→成土→成形→半乾燥 成土、成形の道具 上焼に用いられる陶土	原稿・図版	ｸﾞﾗﾌｨｯｸ処理	解説パネル	
			成土～成形段階のサンプル	——	実物	ステージ	
			成土、成形の道具 ・ジョウヤチグルマ、カナ、ハシタティー、ナリ、カー等	木製 鉄製 苫製等	実物	ステージ	
			製法と工程②―施釉～窯入れ ・加工、装飾→乾燥→釉掛け→本焼き 加工の道具と窯道具／釉薬	原稿・図版	ｸﾞﾗﾌｨｯｸ処理	解説パネル	
			施釉～窯入れ段階のサンプル	——	実物	ステージ	
			施釉、窯入れの道具 ・イシウーシ、キーウーシ、シリジとサーフン　等 ・ハマ、カラマー、サヤ、トゥチグワー　等	木製 石製 等	実物	ステージ	
			製法と工程③―絵付～仕上げ ・絵付け→焼き→完成 絵付けの道具	原稿・図版	ｸﾞﾗﾌｨｯｸ処理	解説パネル	

ゾーン	コーナー	項目	展示内容	原形態	展示処理	展示形式	備考
			絵付け～仕上げ段階のサンプル	——	実物	ステージ	
			絵付け～仕上げの道具	——	実物	ステージ	
	荒焼	荒焼の製法と工程	荒焼	原稿・図版	グラフィック処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す
			南ヌ窯	調査資料	造形処理 映像処理	ファンタビュー (断面模型＋映像)	断面模型とCG映像の組み合わせにより、窯の内部構造、焼物の並べ方、焼成過程火入れと火の回り方等を解説
			荒焼窯（トンネル式）の構造	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			荒焼の製法と工程 ・製法と工程①―成土～成形、加工 ・製法と工程②―窯入れ～仕上げ	調査資料	映像処理	映像検索装置	
			製法と工程①―成土～成形加工 ・原土採掘→成土→成形→半乾燥→加工・装飾 成土、成形、加工の道具 荒焼に用いられる陶土	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			成土～成形加工段階のサンプル	——	実物	ステージ	
			成土、成形、加工の道具 ・タニンチャー ・アラヤチグルマ、ハーカチティージクン、イビラ　等	木製 鉄製 等	実物	ステージ	
			製法と工程②―窯入れ～仕上げ ・乾燥→本焼き→焼き→完成 窯道具	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			窯入れ～仕上げ段階のサンプル	——	実物	ステージ	
			窯道具 ・グッチャー、カラマーグワ コーサーエイ、ハナグチサレ	木製 等	実物	ステージ	
		瓦も焼いた荒焼窯	琉球の赤瓦	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	

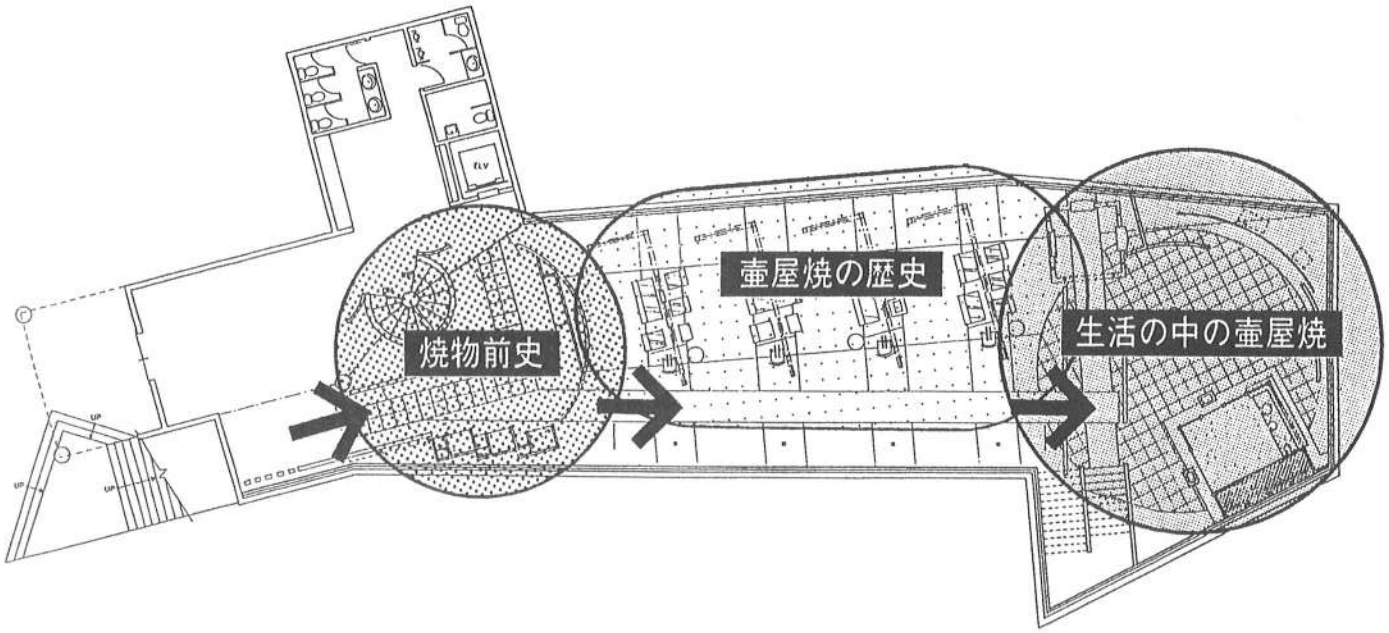
ゾーン	コーナー	項目	展示内容	原形態	展示処理	展示形式	備考
			・カラヤー（瓦づくり）				
			赤瓦 黒瓦	瓦	実物	ステージ ※	
	特徴的な壺屋の技法	——	特徴的な壺屋の技法	原稿・図版	グラフィック処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す
		施釉技法	施釉技法 ・流し掛け ・絵付け（赤絵等）　等	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			施釉技法の特色ある焼物	——	実物	ケース	
			施釉技法の道具	——	実物	ケース	
		加飾技法	加飾技法 ・線彫、象嵌、貼付け、透し彫り　等	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			加飾技法の特色ある焼物	——	実物	ケース	
			加飾技法の道具	——	実物	ケース	
		文様	文様の特色 ・唐草、菊花、掛子　等	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			文様の特色ある焼物	——	実物	ケース	
			文様を描く道具	——	実物	ケース	
		影響のあった海外の技法	影響のあった海外の技法 ・唐三彩、いっちん　等	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			唐三彩 いっちん　等	——	実物	ケース	
	特徴的な壺屋の焼物	——	特徴的な壺屋の焼物	原稿・図版	グラフィック処理	コーナーパネル	コーナーの概要を示す
		厨子甕	厨子甕の歴史 ・沖縄独特の死生観	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			意匠パターンの変遷	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	

展示構成リスト 23

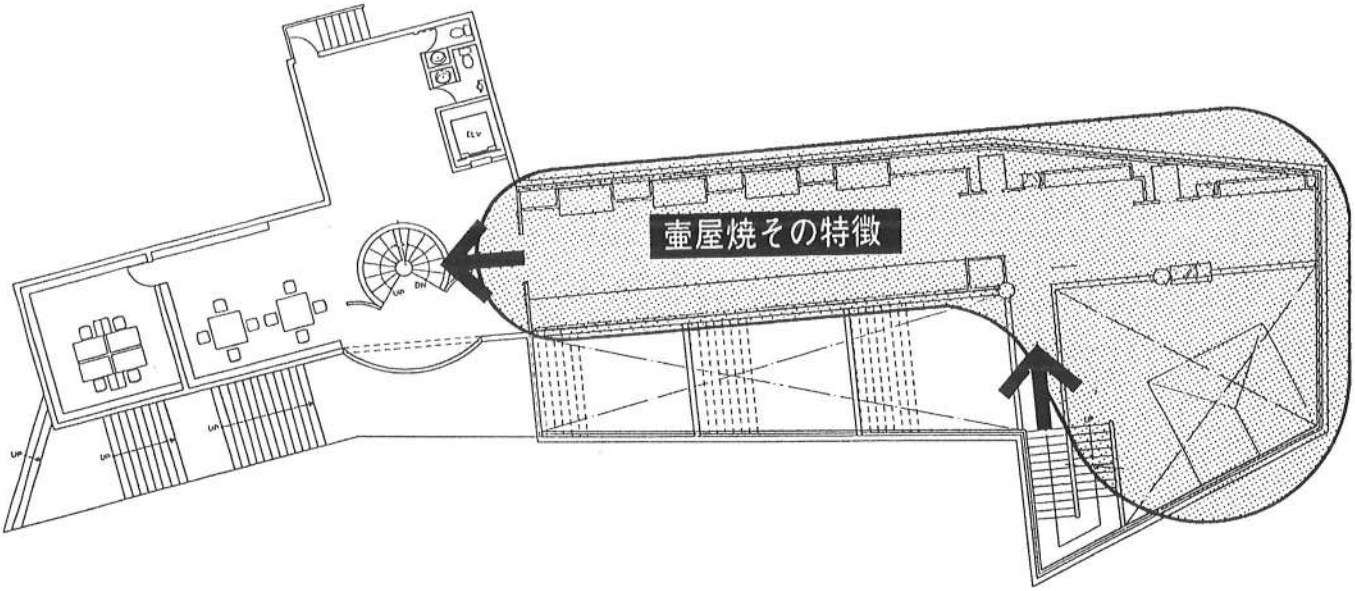
ゾーン	コーナー	項目	展示内容	原形態	展示処理	展示形式	備考
			台湾、香港の骨甕の影響	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			甕型厝子甕 家型厝子甕　等	厝子甕	実物	ケース	
			台湾、香港の骨甕	骨甕	実物		
		シーサー	シーサーの歴史と 魔除けとしての意味	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			意匠パターンの変遷	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			中国の狛犬の影響	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			さまざまなシーサー	シーサー	実物	ケース	
			中国の狛犬	狛犬	実物		
		抱瓶	農民の愛用品、抱瓶の特徴	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			抱瓶	抱瓶	実物	ケース	
		カラカラ	特徴と名前の由来	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			カラカラ	カラカラ	実物	ケース	
		ナナゴータワサカー	特徴と名前の由来	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			ナナゴータワサカー	ナナゴータワサカー	実物	ケース	
		嘉瓶	特徴と名前の由来	原稿・図版	グラフィック処理	解説パネル	
			嘉瓶	嘉瓶	実物	ケース	

ゾーニング及び動線図 24

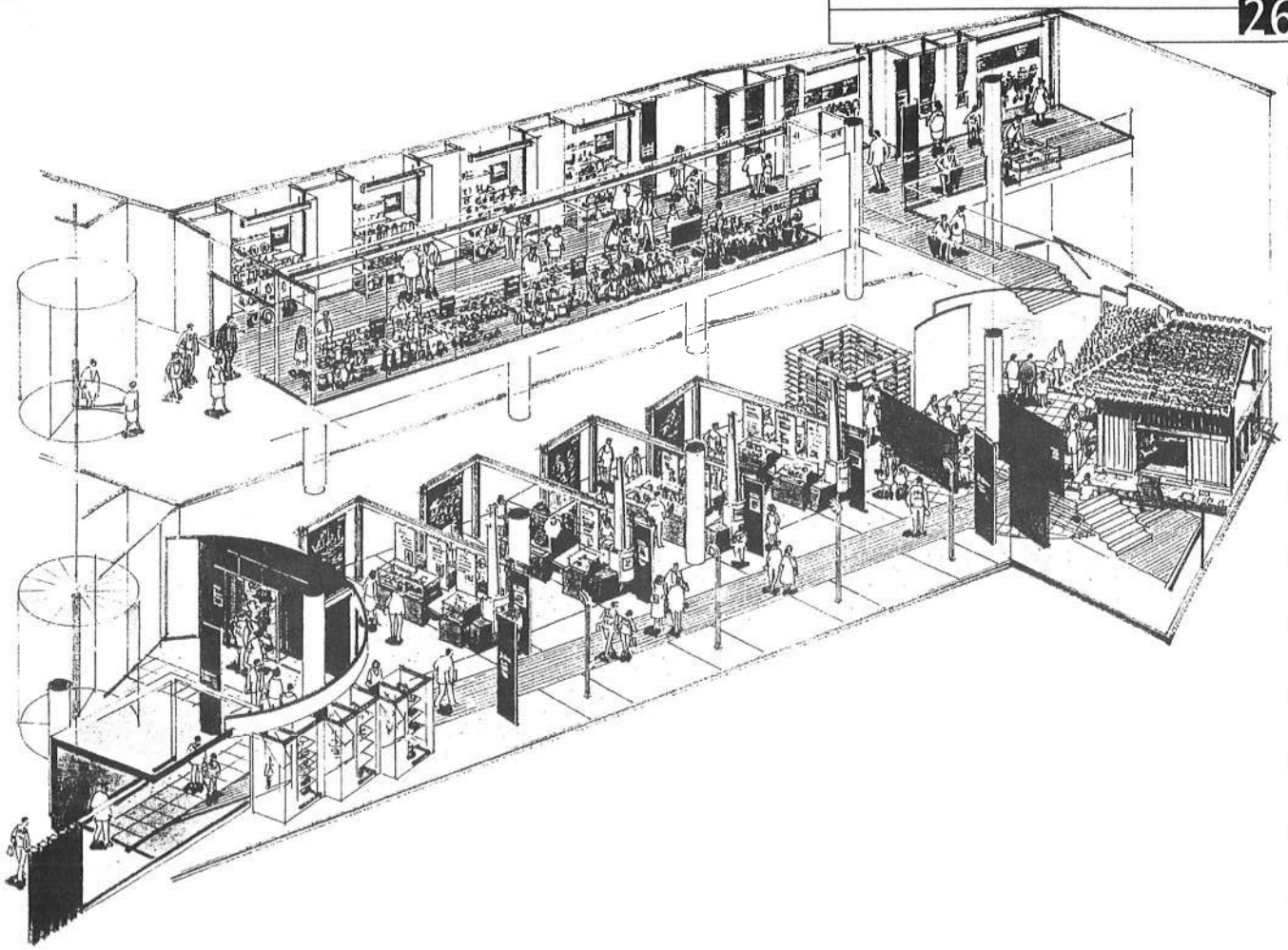
1F



ゾーニング及び動線図 2F 25

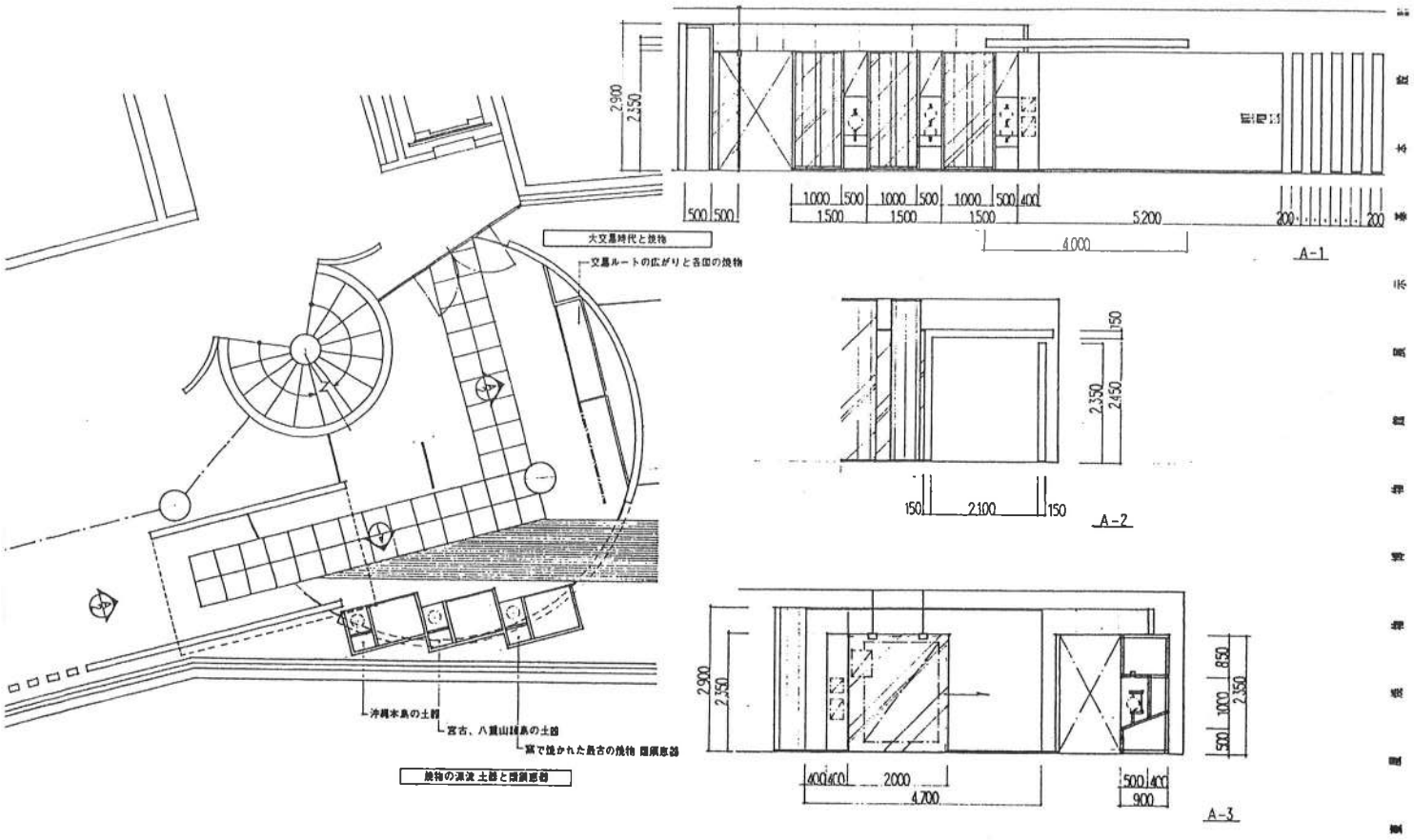


イメージスケッチ 26

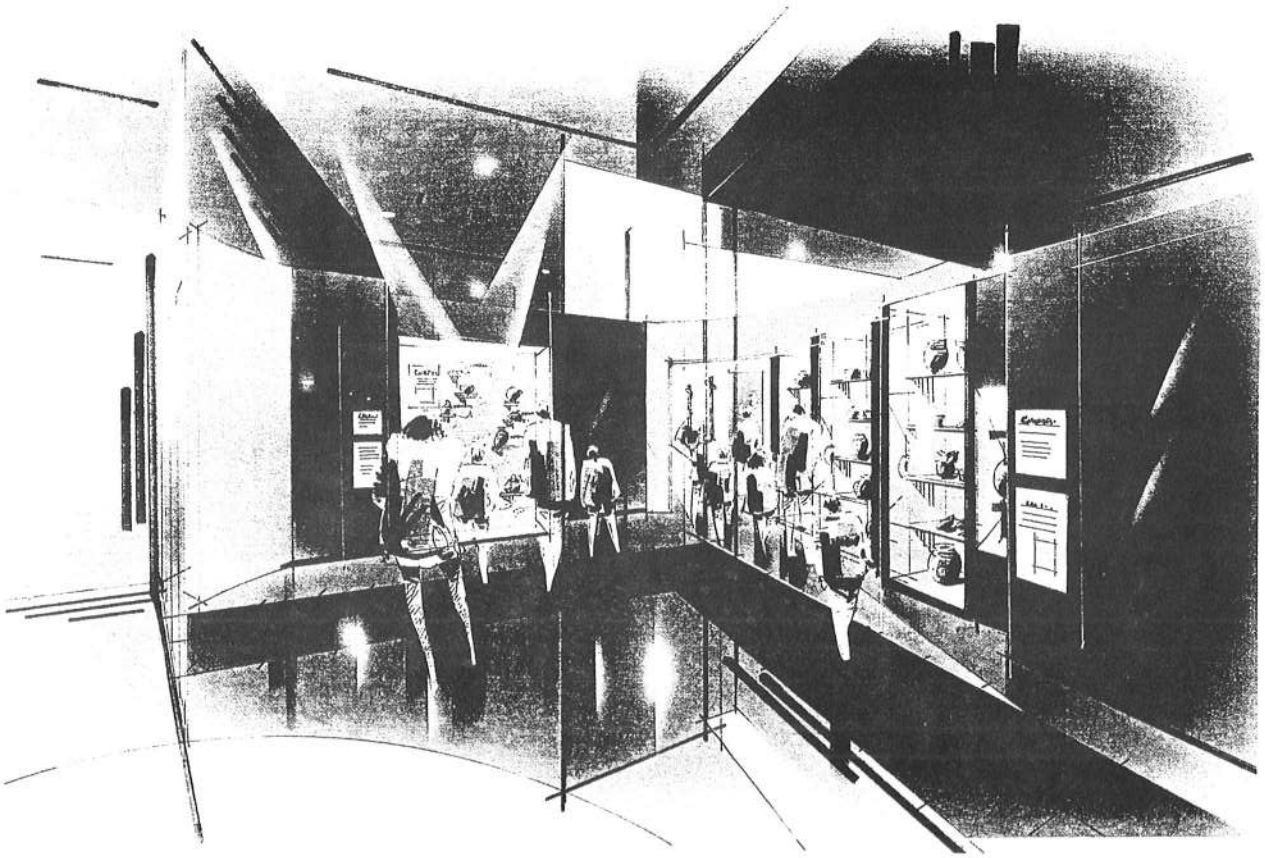


焼物前史／平面図・立面図・断面図 27

S=1：100

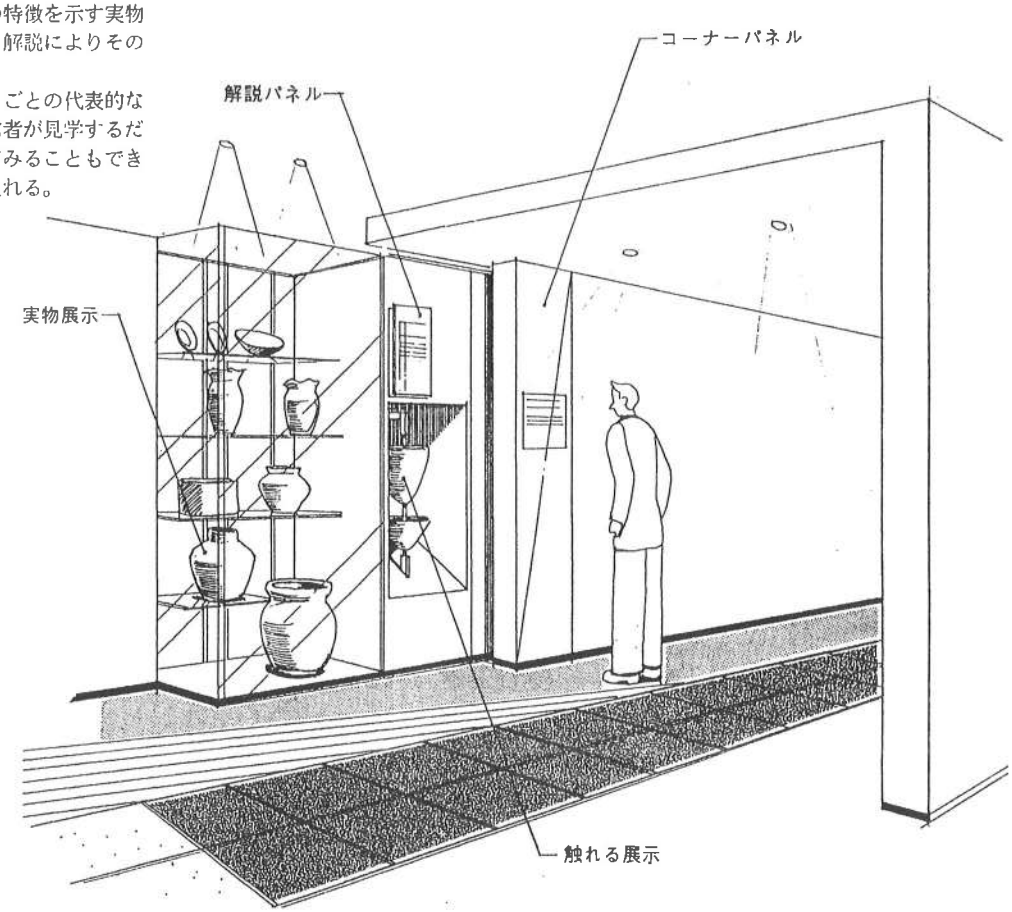


焼物前史／ゾーンスケッチ 28



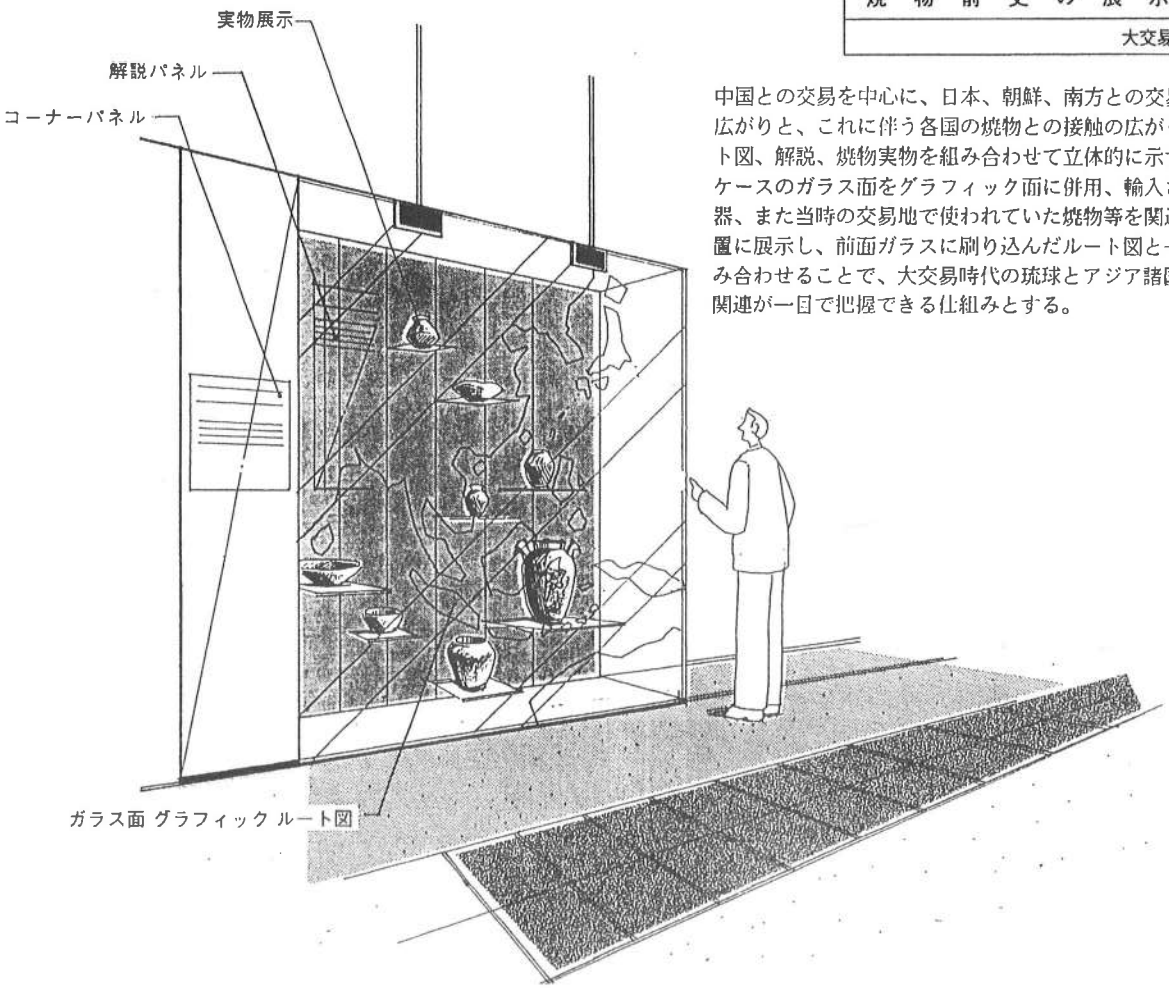
焼物前史の展示展開 29
焼物の源流土器と類須恵器

「沖縄本島の土器」「宮古・八重山の土器」「窯で焼かれた最古の焼物類須恵器」の三つの項目に分け、土と火の造形物としての焼物の前史をたどる。各時代、各地域の特徴を示す実物の展示とともに、グラフィック解説によりその詳細を示す。
特に、当コーナーでは、各項目ごとの代表的な土器等をレプリカ製作し、来館者が見学するだけでなく、実際に手をふれるてみることもできる"触れる展示"として取り入れる。



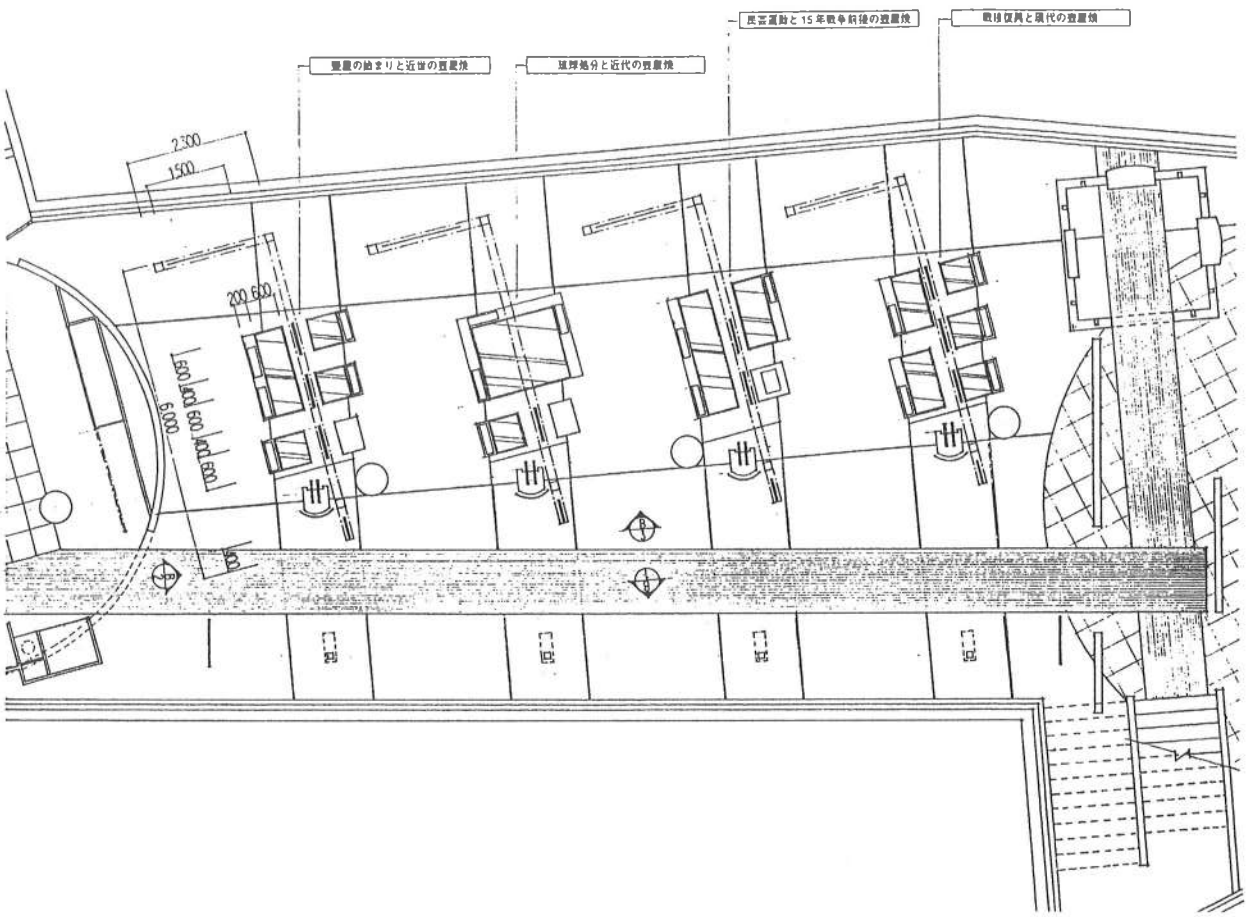
焼物前史の展示展開 30
大交易時代と焼物

中国との交易を中心に、日本、朝鮮、南方との交易ルートの広がりと、これに伴う各国の焼物との接触の広がりを、ルート図、解説、焼物実物を組み合わせて立体的に示す。
ケースのガラス面をグラフィック面に併用、輸入された陶磁器、また当時の交易地で使われていた焼物等を関連地域の位置に展示し、前面ガラスに刷り込んだルート図と一体的に組み合わせることで、大交易時代の琉球とアジア諸国の焼物の関連が一目で把握できる仕組みとする。



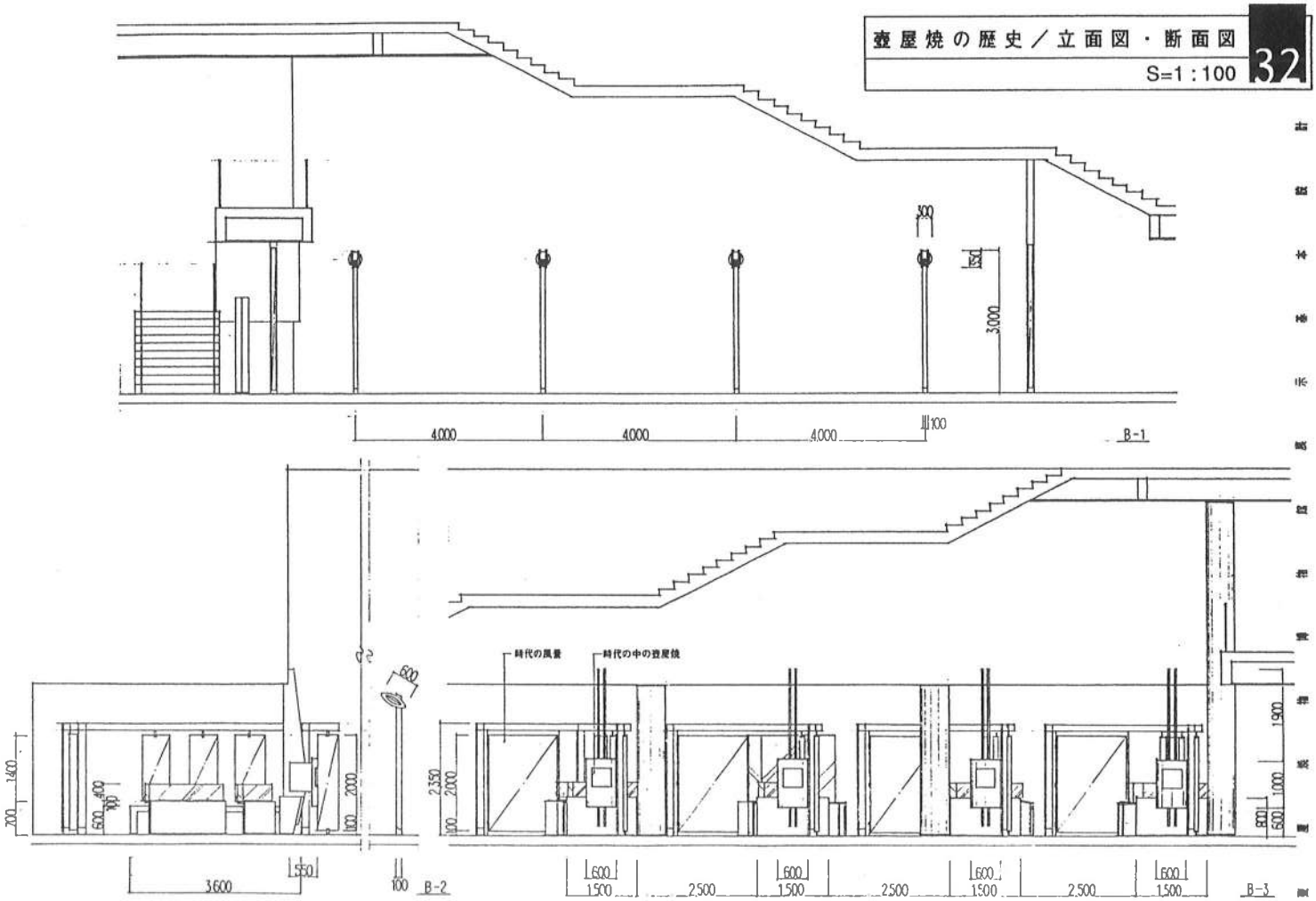
壺屋焼の歴史／平面図 31

S=1：100



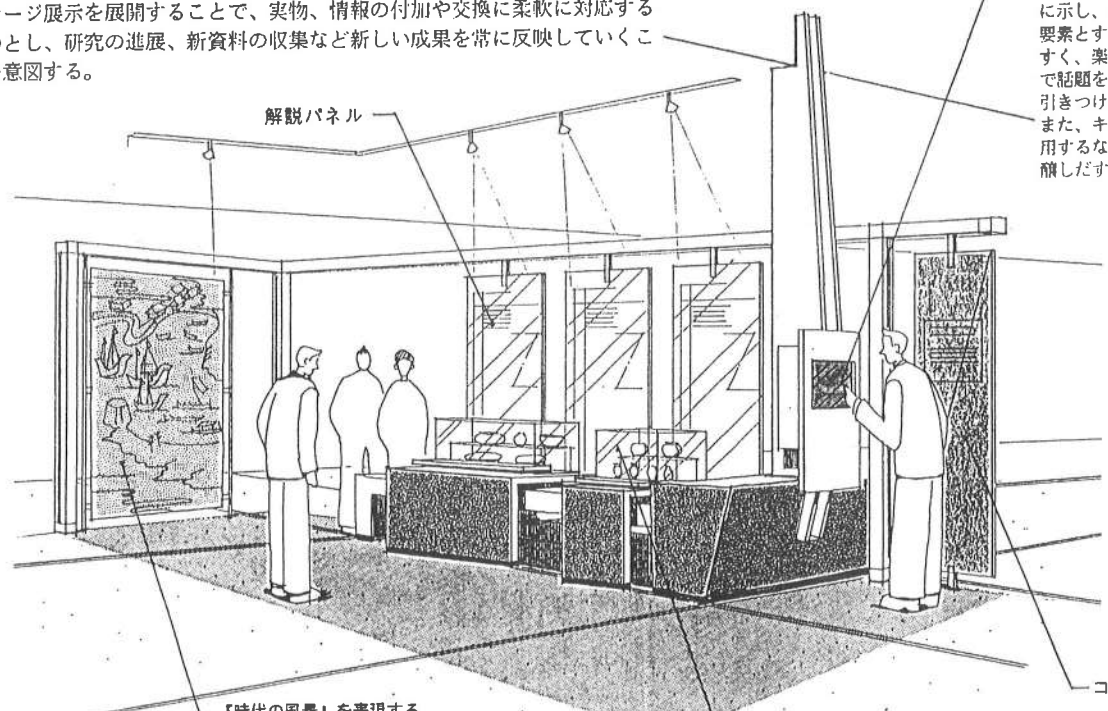
壺屋焼の歴史／立面図・断面図 32

S=1：100



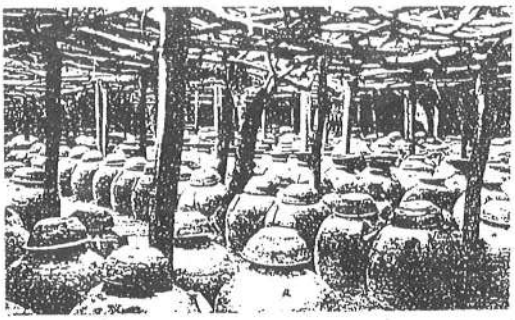
壺屋焼の歴史の展示展開 34

「壺屋の始まりと近世の壺屋焼」から「戦後復興と現代の壺屋焼」まで、壺屋焼の歴史を四つの時代に区分し、時代ごとのエポックと関連情報を絡め、今日までの壺屋焼の歩みをたどる。
時代ごとのステージを設け、コーナーパネルと時代の特徴を示すミニジオラマをサイン的に配置、モジュール化したケース及びグラフィックパネルを実物と情報の量に応じて自由に組み合わせる形とする。こうした時代ごとのパッケージ展示を展開することで、実物、情報の付加や交換に柔軟に対応するものとし、研究の進展、新資料の収集など新しい成果を常に反映していくことを意図する。



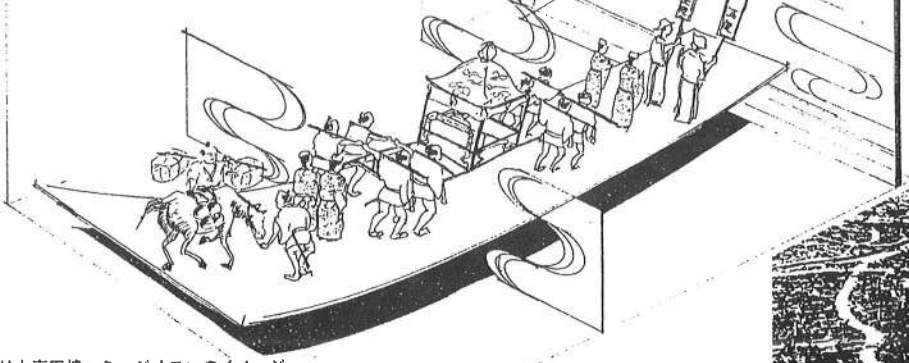
壺屋焼の歴史の展示展開 35
ミニジオラマの資料

『壺屋の始まりと近世の壺屋焼』コーナー
「江戸上りと壺屋焼」

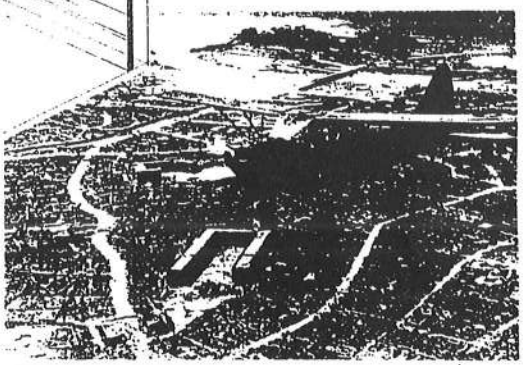


『琉球処分と近代の壺屋焼』コーナー「泡盛工場とモロミ甕への仕込み」

『民芸運動と15年戦争前後の壺屋焼』コーナー
「昭和初頭の壺市場」

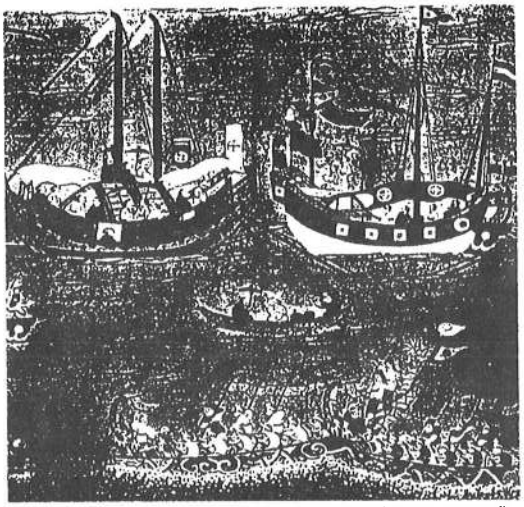


「江戸上りと壺屋焼」ミニジオラマのイメージ
江戸上りには献上品としての泡盛が常に携えられていた。
泡盛甕として使われた壺屋焼の姿とともに、近世の薩摩藩、
江戸幕府との関係が象徴的に読み取れる江戸上りの場面を
採用することが考えられる。
（ミニジオラマの各場面については実施設計段階で決定する）



『戦後復興と現代の壺屋焼』コーナー「焼け残った壺屋の街」

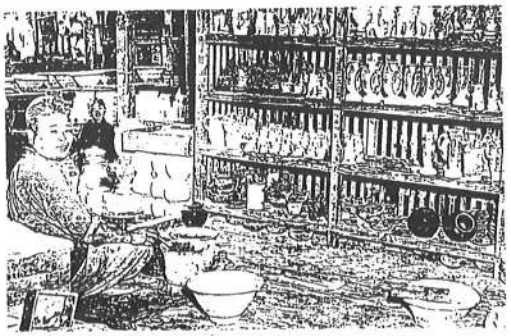
壺屋焼の歴史の展示展開 36
環境グラフィックの資料



『壺屋の始まりと近世の壺屋焼』コーナー「冊封使を迎える那覇港」

『琉球処分と近代の壺屋焼』コーナー「日清・日露景気に沸く壺屋」

『民芸運動と15年戦争前後の壺屋焼』コーナー
「来沖した民芸運動家たち」

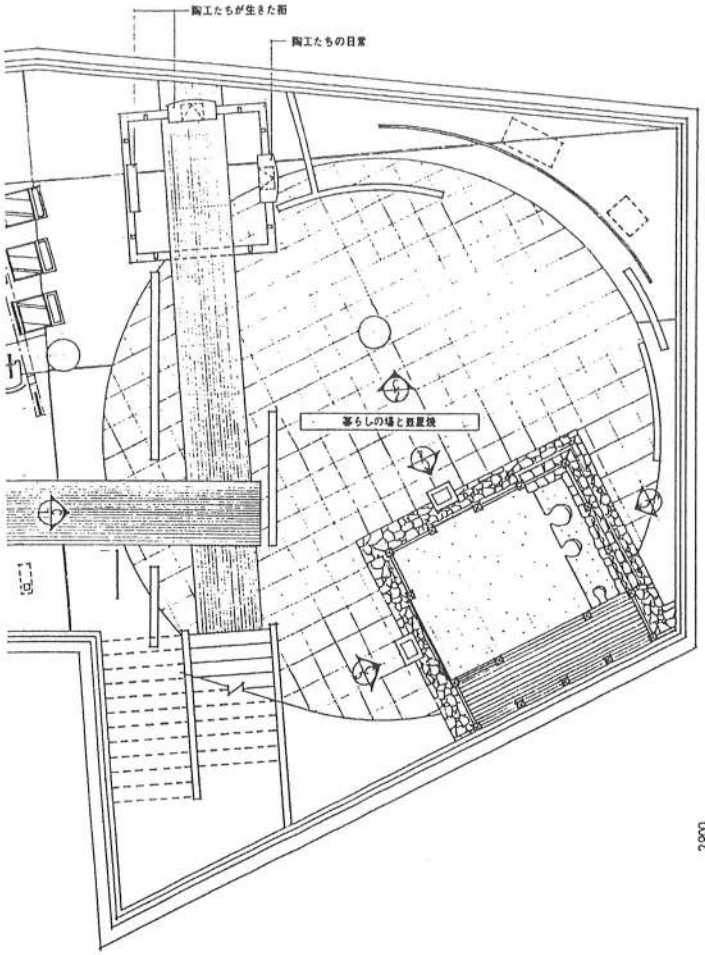


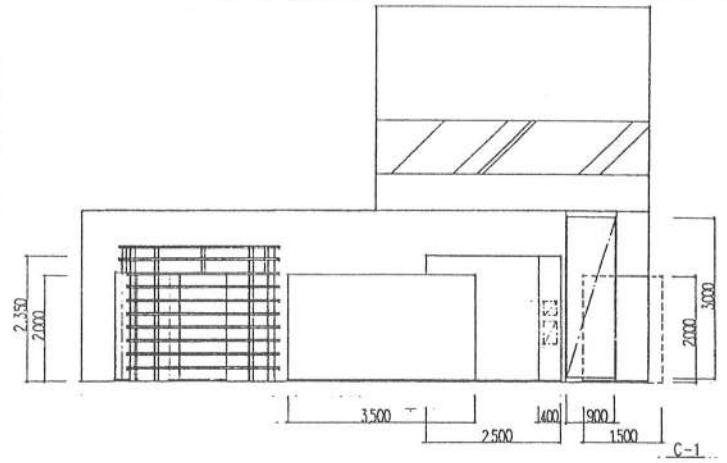
『戦後復興と現代の壺屋焼』コーナー
「戦後復興に力を尽くす壺屋の人々」

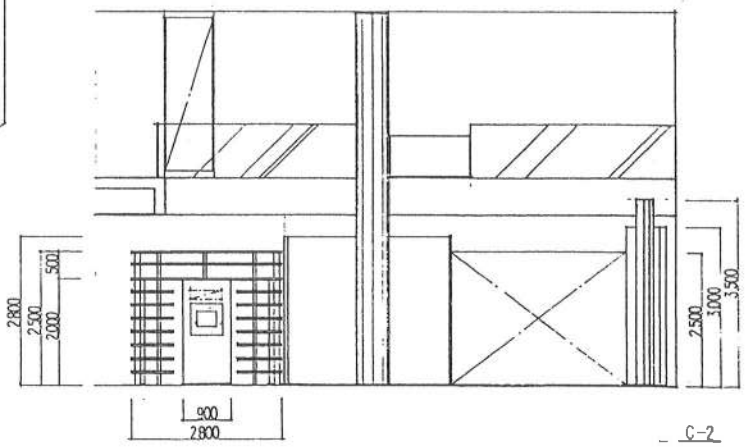
（環境グラフィックの各場面については実施設計段階で決定する）

生活のなかの壺屋焼／平面図・立面図 37

S=1：100

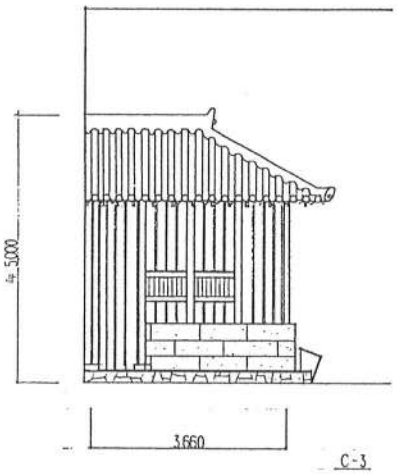


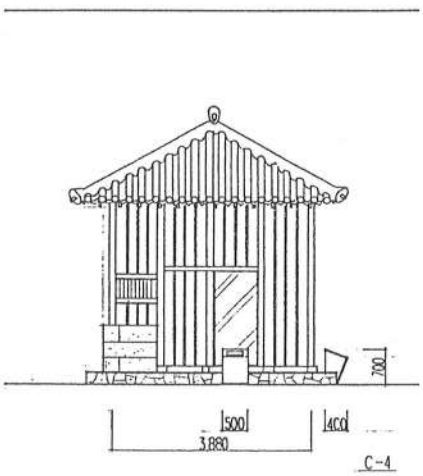


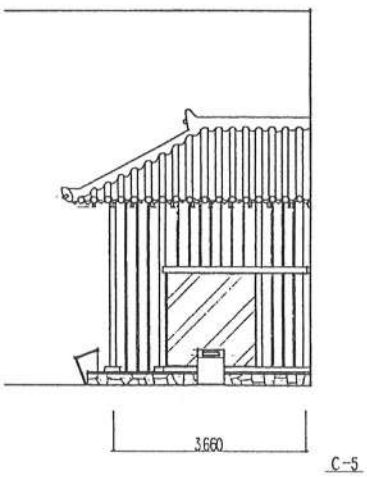


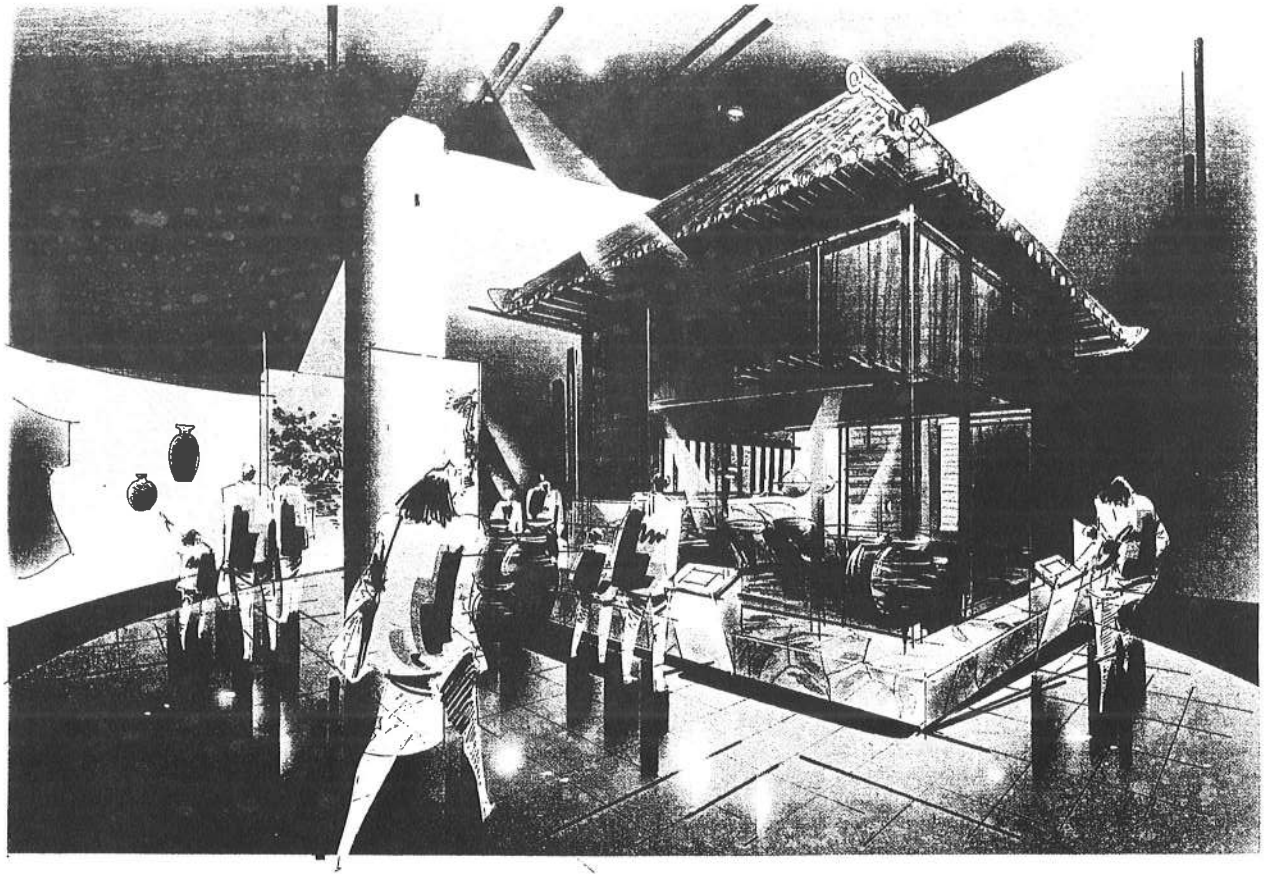
生活のなかの壺屋焼／立面図 38

S=1：100









生活のなかの壺屋焼の展示展開 40

暮らしの場と壺屋焼（環境再現）

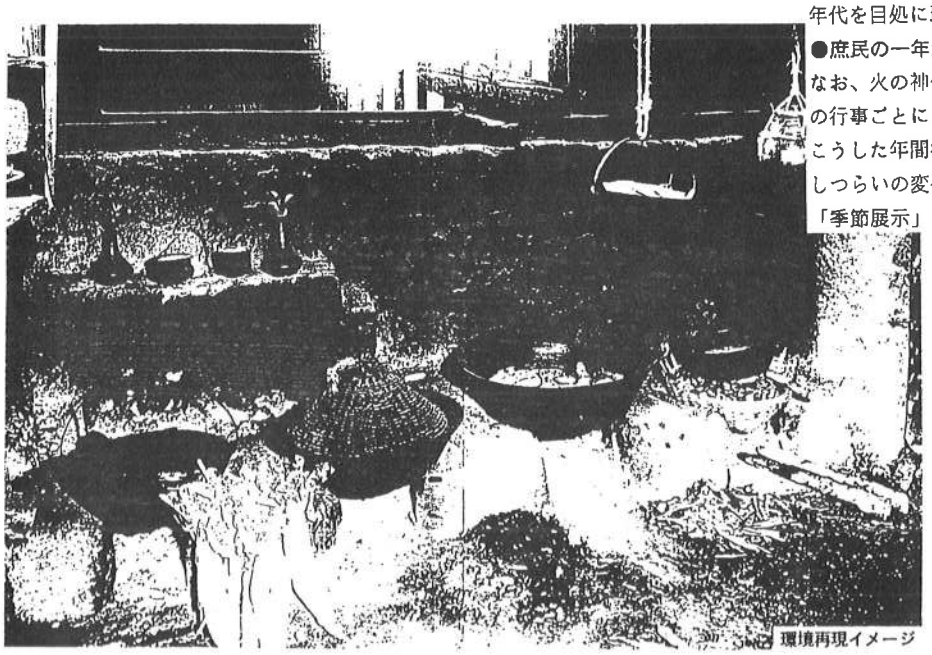
●日常の場としての台所の再現

沖縄の人たちの暮らしに密着した生活の道具としての壺屋焼を紹介する。このため、日常的な生活と壺屋焼の関係が最も良く見えてくる場として台所を取り上げ、これを中心に環境再現する。

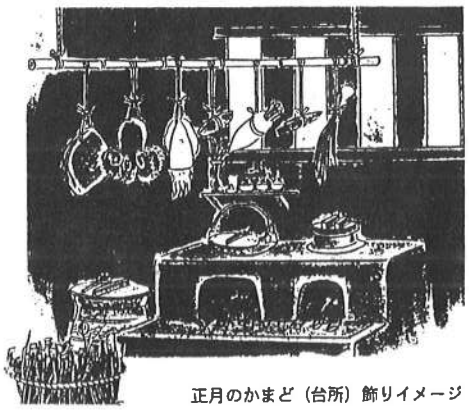
再現民家は、那覇市の民家とし、再現範囲は台所及び板の間の一部、時代背景としては、民芸運動によって壺屋焼が再認識され、かつ上焼、荒焼ともに庶民の生活に数多く使用されていた昭和10年代を目処に環境構成を図る。

●庶民の一年が見えてくる季節展示を採用

なお、火の神信仰を下敷きに、台所・かまど周りには、四季折々の行事ごとにさまざまな飾り付けが行われていた。当コーナでは、こうした年間行事に合わせた展示替え、飾り付けを行い、台所のしつらいの変化などと合わせて、一年を通じた庶民の日常を映す「季節展示」を採り入れ、変化に富んだ展示を実現する。



環境再現イメージ

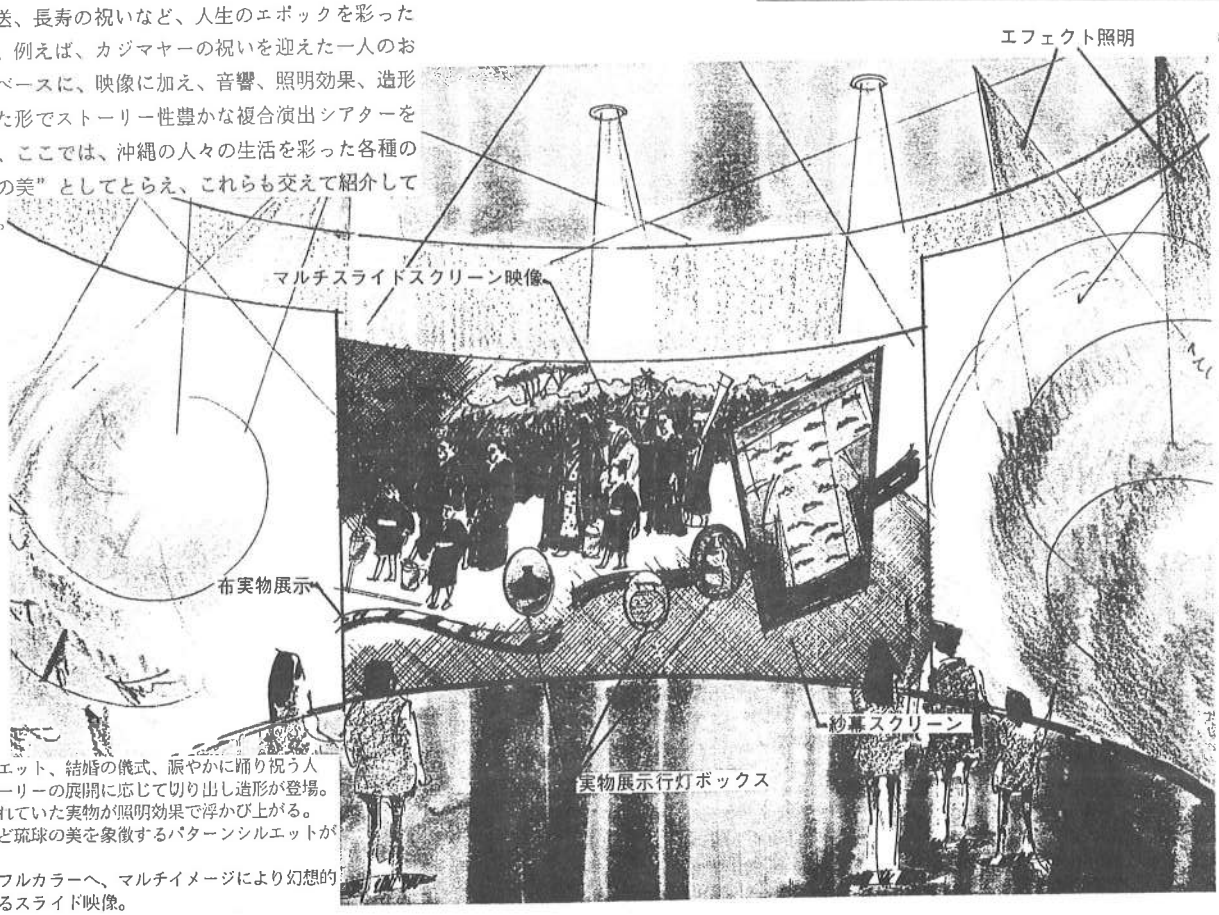


正月のかまど（台所）飾りイメージ

生活のなかの壺屋焼の展示展開 41

暮らしの場と壺屋焼（複合演出シアター）

環境構成の場を活用し、日常の場と対比する形で、ハレの場で使われた壺屋焼に焦点を当てて紹介する。
結婚、誕生、葬送、長寿の祝いなど、人生のエポックを彩った壺屋焼について、例えば、カジマヤーの祝いを迎えた一人のお年寄りの語りをベースに、映像に加え、音響、照明効果、造形や実物等も交えた形でストーリー性豊かな複合演出シアターを展開する。なお、ここでは、沖縄の人々の生活を彩った各種の工芸品を“琉球の美”としてとらえ、これらも交えて紹介していくものとする。



- 花嫁行列のシルエット、結婚の儀式、派やかに踊り祝う人の姿など、ストーリーの展開に応じて切り出し造形が登場。
- 紗幕の背後に隠れていた実物が照明効果で浮かび上がる。
- 紅型、絣模様など琉球の美を象徴するパターンシルエットが映像を彩る。
- モノトーンからフルカラーへ、マルチイメージにより幻想的な動きを表現するスライド映像。

生活のなかの壺屋焼の展示展開 42

複合演出シアターシノプシス（ウチナンチュの一生と壺屋焼）

琉球の美（映像）

・紅型の美しい花嫁衣装
・祝いの膳を飾る堆錦等漆器類
・那覇ミンサー、花織等伝統の織物
・漆器　・織物　・紅型

壺屋焼（実物）

- ・ユシビン
- ・ユシビン　・香炉　・茶碗　・祝いの皿、器、カラカラ等　・チュワカサー（一升徳利）
- ・蓋付き壺等　・食い初め用の器　・古酒用瓶
- ・フチュクルビン（懐瓶）　・厨子甕　・渡名喜瓶　・対瓶
- 結納　結婚　祝いの皿、器、カラカラ等　カジマヤー　誕生　葬送

「オバァが語る一生」（進行）

結納
嫁乞い（トゥジ クゥーイ）そしてニフェ

▷嫁乞いに応え結婚が決まる。母親など女性たちの間で、婚約成立の祝い・ニフェーが行われる。
▷婿側は酒の入ったビンシー（酒壺）と、マギに盛ったサーターアンダギー等の料理を持参。ユシビンの酒で「親族固めの盃」が交わされる。
▷帰りには、持参のユシビンに御酒を入れて持ち帰ってもらう。
▷持ち帰った御酒、御水で「御火の神様」に喜びの報告がなされる。

結婚
ニービチを彩る

▷朝、「瓶子箱（ユシビン）」を持ったお供と婿添いを伴い嫁入り。昔は拝所や井戸を引き回す嫁いじめに合ったもの。火の神を拝み香炉に線香を立てるのも妨害される。
▷夕方、提灯を先頭に婚礼の唄を歌いながら嫁入り行列。
▷婚家で黒い朝衣（チョーシン）を取り美しい花嫁姿を披露。ユシビンの水を茶碗に受け眉間に付ける「水盛い（ミジムイ）」、そして花嫁花婿が共に飲食する「寄合い盆（ユレーヌウブン）」の婚礼儀式がとり行われる。
▷台所では酒宴の用意が忙しい。

誕生
新しい命を祝う

▷初めての子供が生まれる。
難産で、呪いに家中の蓋付きの壺や急須の蓋を取って歩く。
▷誕生に合わせ、子供の結婚の日を夢見て、古酒づくりのための泡盛を仕込み、台所の床下に埋める。
▷9か月と9日めに、ご飯と汁を用意し、「食い初め（ククヌカンヌ・ウユー）」をして、一生食べることに不自由しないよう祈る。

葬送
悲しみと祈りを託す

▷身近な死を悼む。
生前愛用の品々とともに、死出の旅路へのお土産として、フチュクルビンに泡盛を入れ、死者の懐に入れて持たせた。
▷親族が揃い洗骨、骨をあらためて厨子甕に納める。
▷墓前には渡名喜瓶を、仏前には対瓶に泡盛を入れて置き、供物とともに供え供奠する。

長寿の祝い
カジマヤーを寿ぐ

▷九十七歳の長寿の祝い、「カジマヤースージ」を迎える。
長寿を喜び、子供、孫、曾孫等、大家族が勢ぞろいして祝いの宴が始まる。

▷カジマヤーの祝いの場とオーバーラップし、これまでの人生の節目、節目のそれぞれの場面が思い浮かぶ。

方言を交えたナレーション、メイン映像
（シルエット展開からフルカラーへ）

BGM、サブ映像
（三線、歌声、人々の踊りのパターン映像等）

サブ映像
（紅型、絣模様等琉球の美を表すパターンシルエット等）

（モノトーンのシルエット展開）

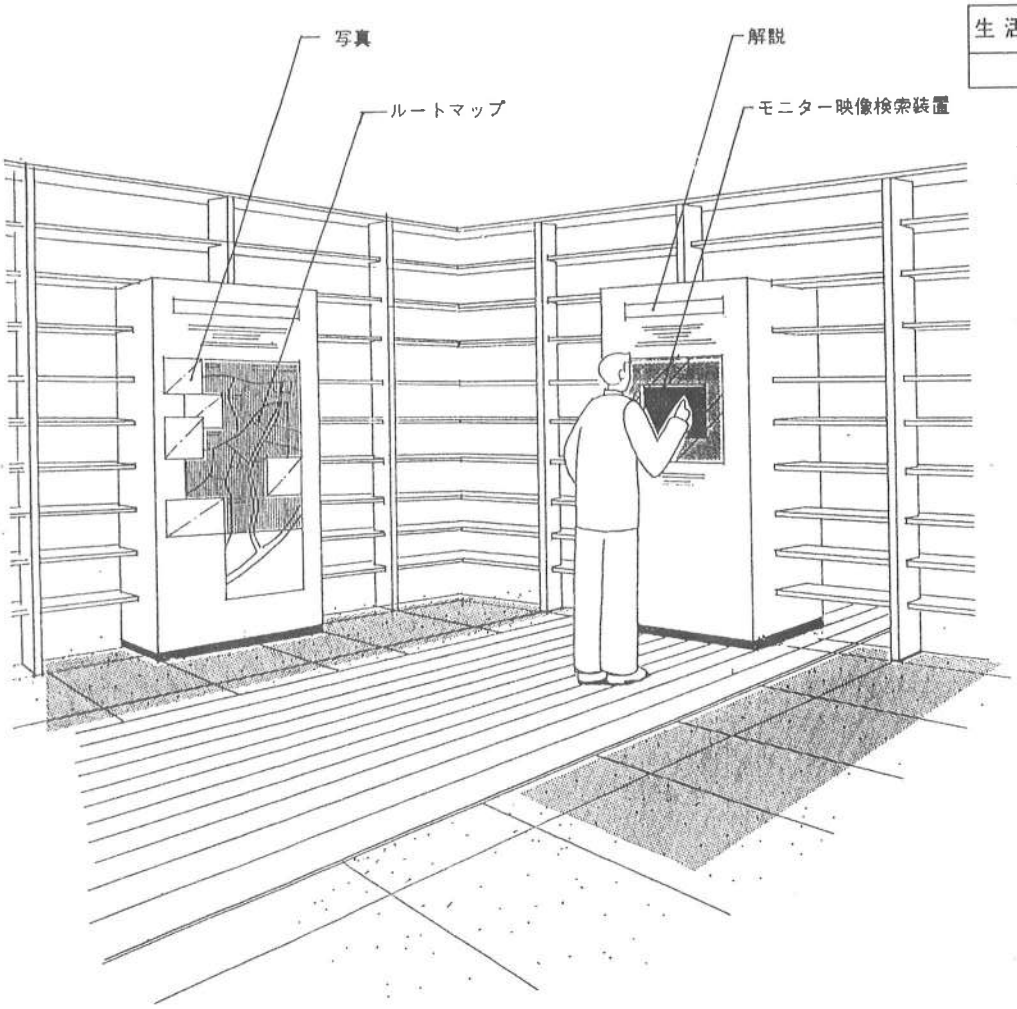
BGM、サブ映像
（賑やかな祝いの言葉、祝い歌等）

（華やかなフルカラーへ）

実物にスポット　造形物の動き　等　／　実物にスポット　／　実物にスポット　／　実物にスポット　造形物の動き　等

生活のなかの壺屋焼の展示展開 43

陶工たちの日常／陶工たちが生きた街



◆ 陶工たちの日常

焼物づくりと日常生活、信仰との関わりなど、壺屋焼を生み出してきた陶工たちの暮らしに焦点を当てて紹介する。陶工たちの日常やエピソードを追った映像プログラムを用意し、来館者が自由に選び楽しめる映像検索装置を用意する。

【検索項目例】
- 初起こしとルート
- カーと陶工たち
- 焼物ができるまでと信仰　等

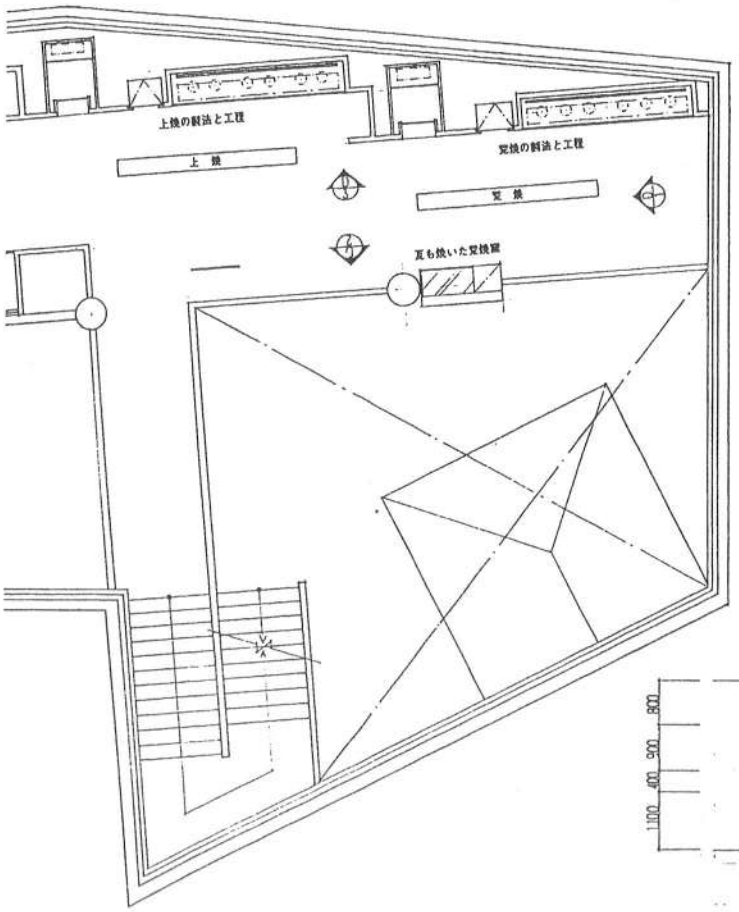
◆ 陶工たちが生きた街

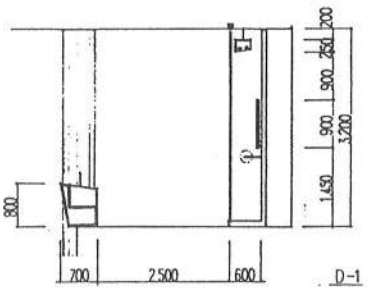
陶工たちが壺屋焼を作り、暮らしを営んだ場としての壺屋の街に焦点を当てて紹介する。最盛期の壺屋の街の紹介とともに、ここでは、周辺の文化財や街並み、特徴的な景観などを結んだスージーグワーネットワークのルート紹介を行う。映像検索装置及び自由に持ち帰れるルートマップを用意し、博物館を核に街への広がりを持った展示を試みる。

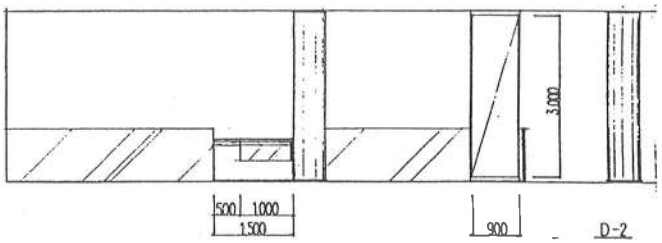
【ルート解説例】
- 祭りルート
- 景観ルート
- やちむんルート　等

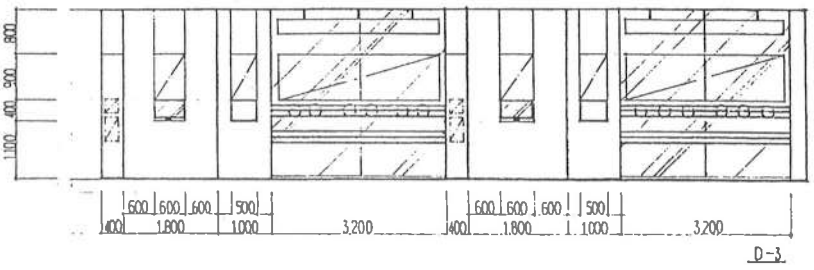
壺屋焼・その特徴／平面図・立面図・断面図 44

S=1：100



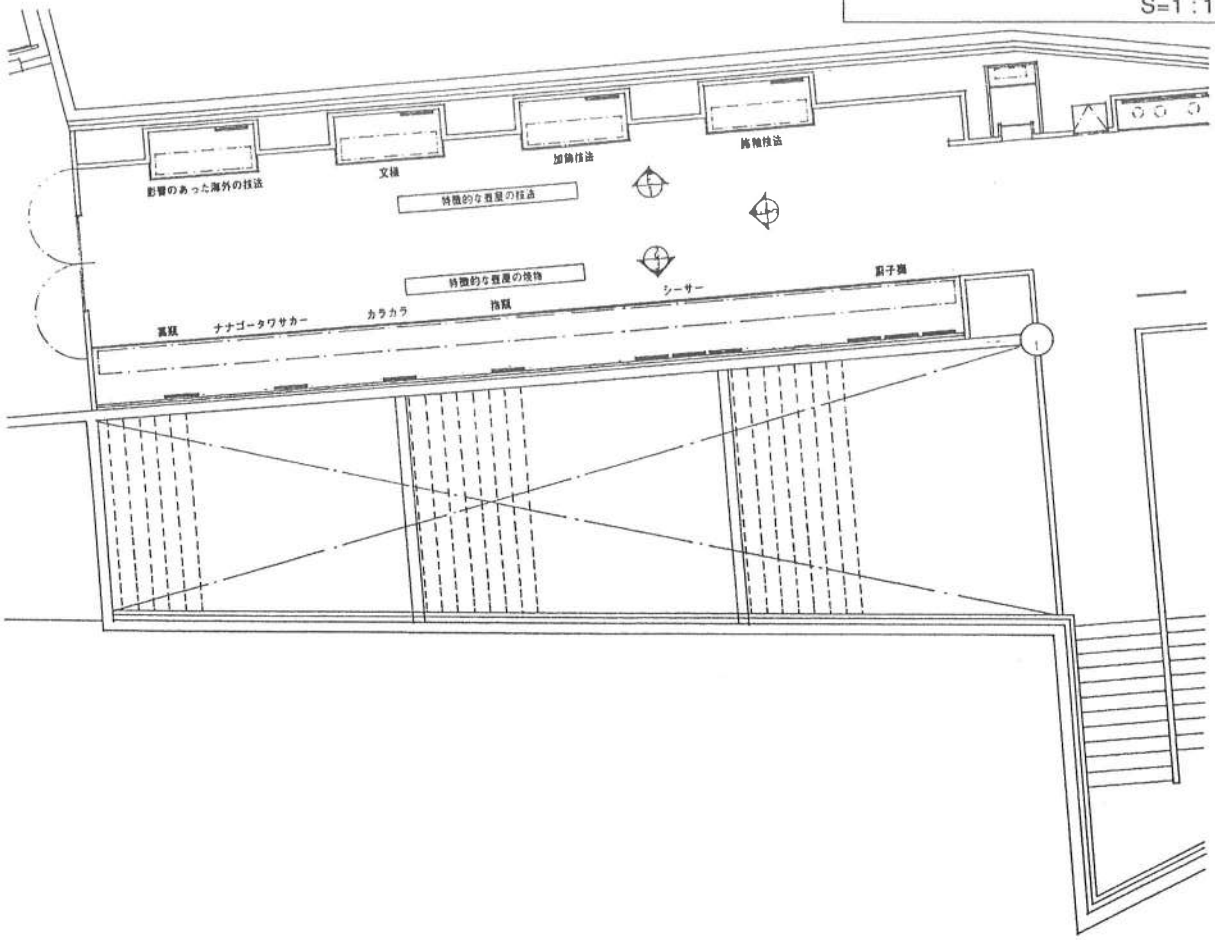






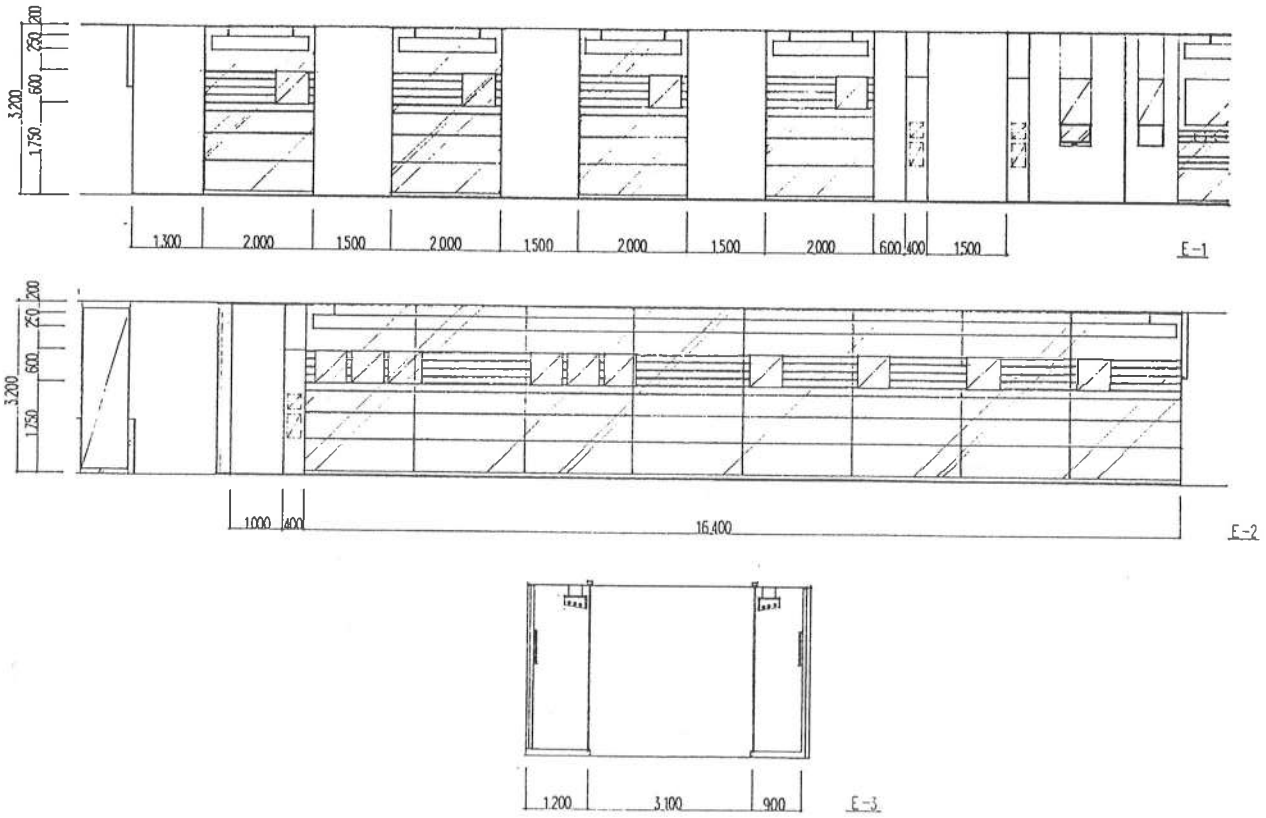
壺屋焼・その特徴／平面図 45

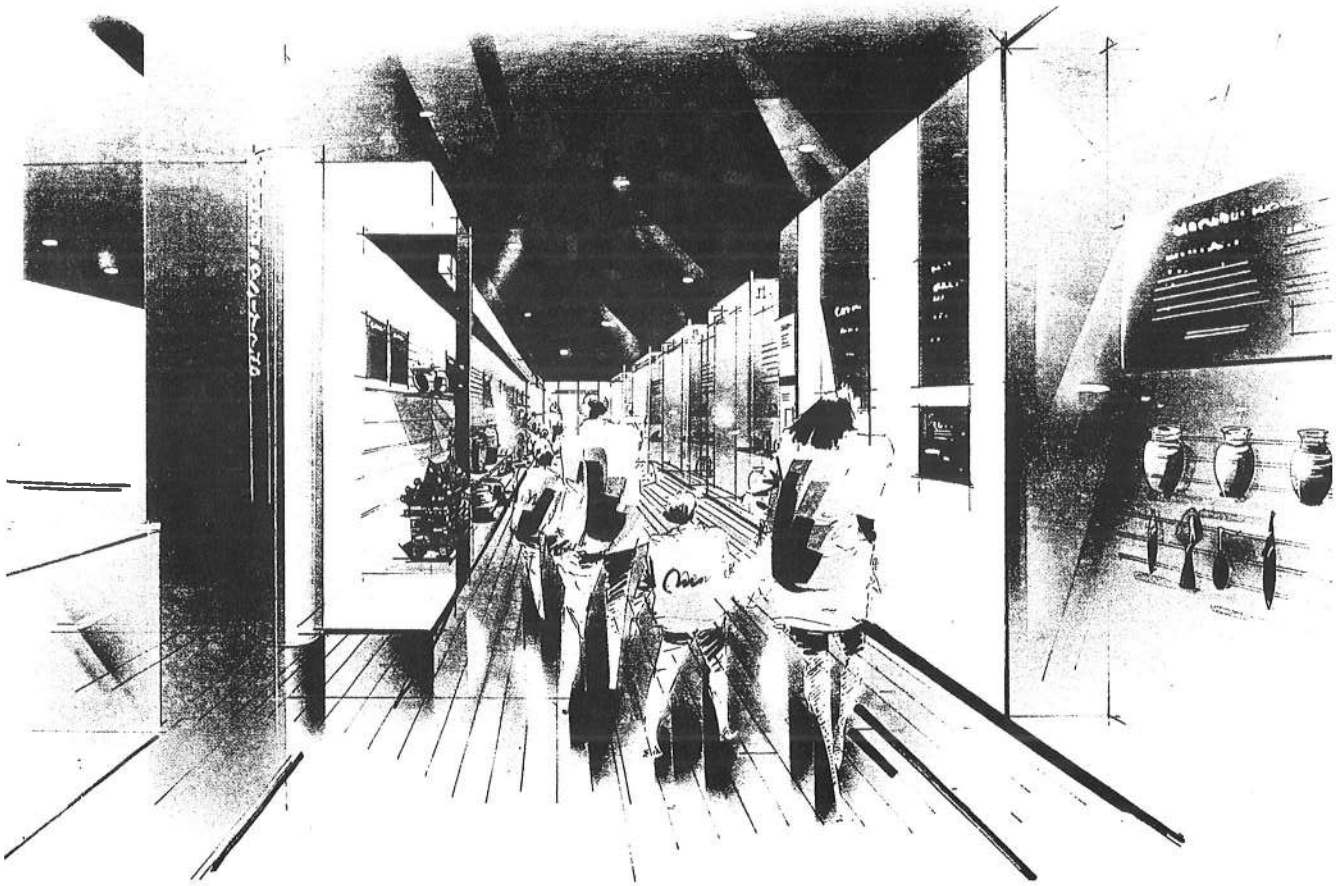
S=1：100



壺屋焼・その特徴／立面図・断面図 46

S=1：100

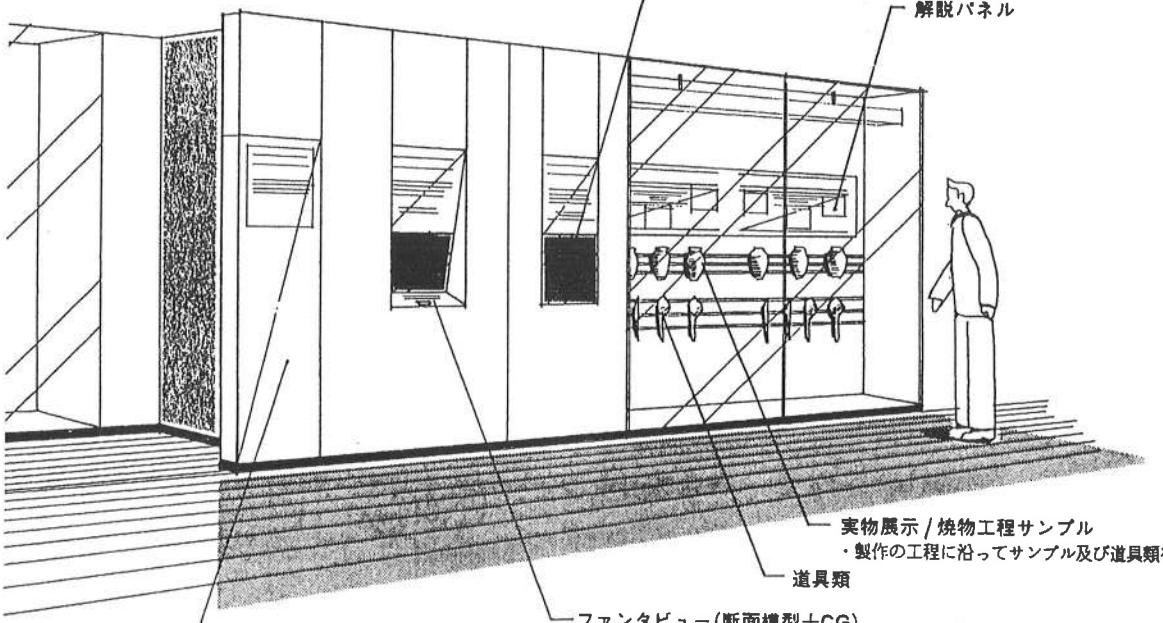




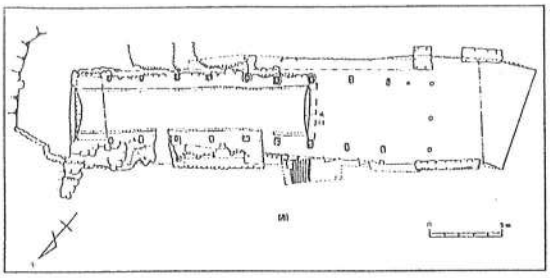
壺屋焼・その特徴／展示展開 48

上焼の製法と工程／荒焼の製法と工程

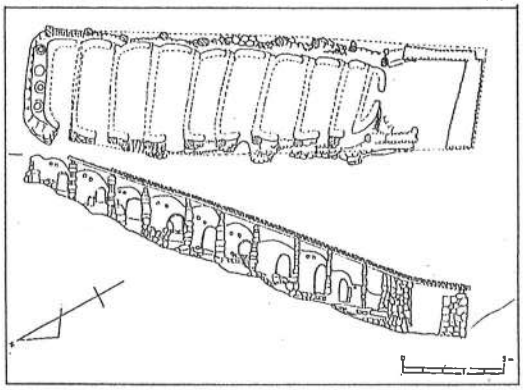
上焼及び荒焼について、それぞれの特徴及び製法と工程を紹介する。
各段階の焼物のサンプルと使用する道具、材料等を組み合わせ、工程を再現した映像解説、グラフィック解説とともに端的に示す。
特に、窯については、東ヌ窯、南ヌ窯をモデルとし、断面模型とコンピュータグラフィックスを組み合わせたファンタビュー手法によって、これまでにない斬新な視点から、分かりやすく、興味深い解説を試みる。



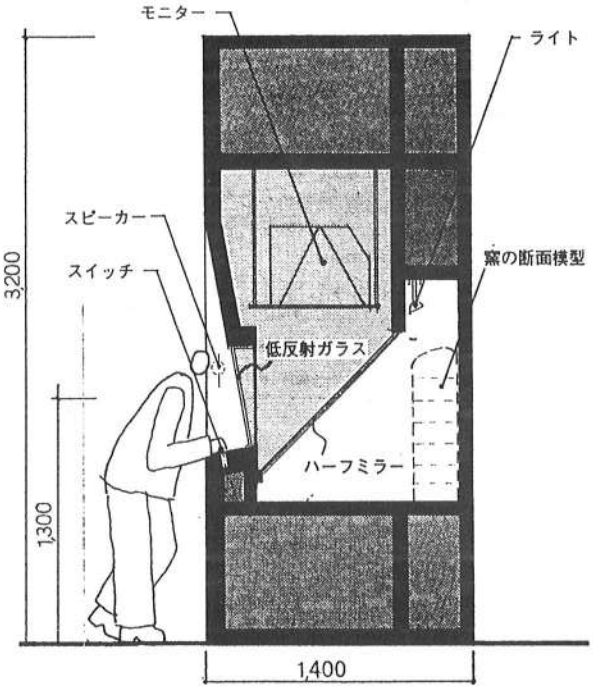
南ヌ窯



東ヌ窯

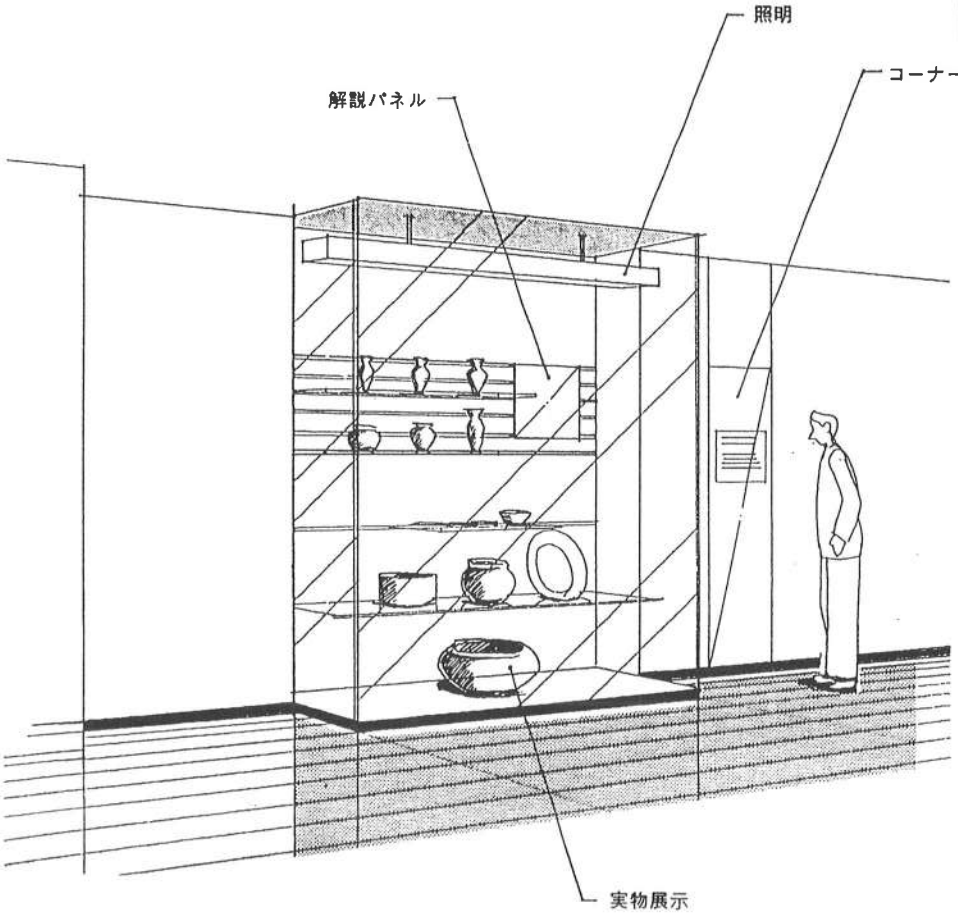


ファンタビュー断面図



【東ヌ窯、南ヌ窯ファンタビューシノプシス例】

断面模型から映像へ		外観を見る		構造を探る		焼成の秘密 ①焼物の配置		焼成の秘密 ②炎の軌跡		再び断面模型へ
東ヌ窯（南ヌ窯）断面模型 ｜ 断面模型そのままのＣＧ映像に切替わる	⇨	窯が回転し、上部から前後左右へと視点を移動しながら窯の外観を一望し、その全体像を紹介する	⇨	窯がワイヤーメッシュで示され、炊口から焼成室へ、俯瞰から断面へと転換しつつ窯の構造を解説する	⇨	窯の特徴によって、大型の甕、瓶、小型のマカイや皿など、焼物ごとに並べ方が異なる窯入れを解説	⇨	火入れ時の炎の勢い、時間経過と炎の回り方、内部の温度の違い等焼物の完成を左右する炎の跡を追う	⇨	窯の外観へと映像が変わり窯が回転して断面に戻る ↓ 東ヌ窯（南ヌ窯）断面模型へ

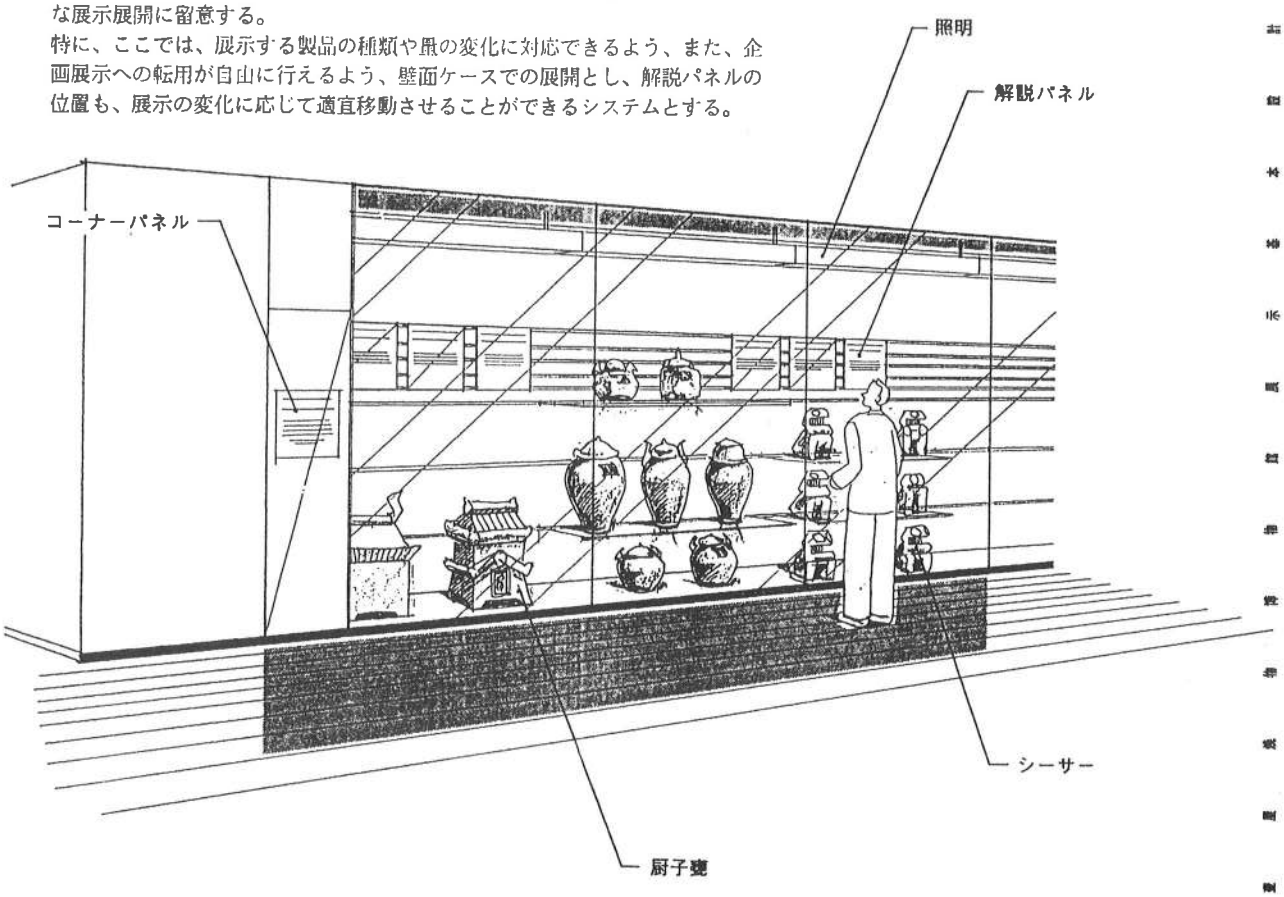


壺屋焼の特徴的な技法について、施釉技法、加飾技法、文様に大きく分類し、これらの技法に影響を及ぼしたと思われる海外の焼物の装飾、加工の技法等についても触れながら紹介する。それぞれの技法が特徴的に読み取れる実物を中心に、各技法の工程を示すサンプル、用いられる道具と完成品を合わせた、パッケージとしての展示、解説とする。
ここでは、技法ごとの特徴的な実物、優品の持つ美しさが十分活きるように、照明、背景等にも注意を払ったギャラリー的な展開に留意する。

壺屋焼・その特徴／展示展開 51

特徴的な壺屋の焼物

厨子甕、シーサー、抱瓶、カラカラ等、沖縄独特の焼物について、その特徴、由来、海外からの影響などを紹介するものとし、それぞれ独自の特徴を示す焼物自体の持つ面白さが十分に生きるよう、実物展示を中心としたギャラリー的な展示展開に留意する。
特に、ここでは、展示する製品の種類や量の変化に対応できるよう、また、企画展示への転用が自由に行えるよう、壁面ケースでの展開とし、解説パネルの位置も、展示の変化に応じて適宜移動させることができるシステムとする。

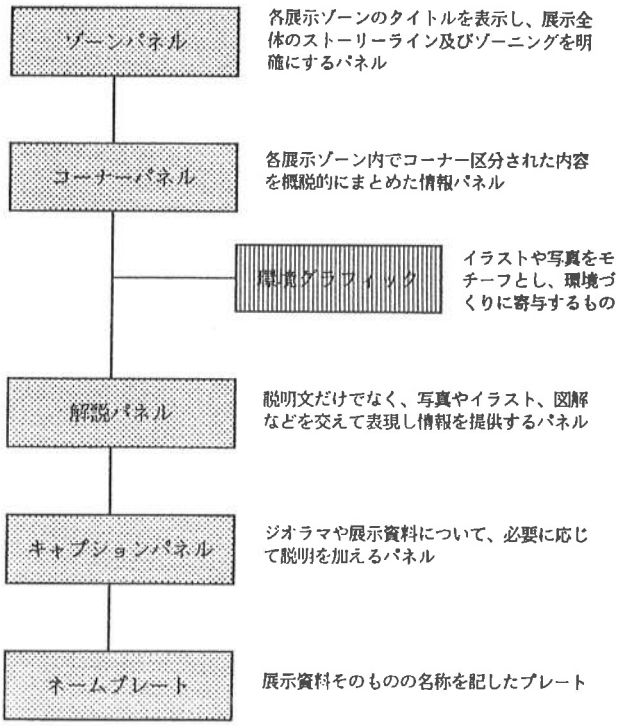


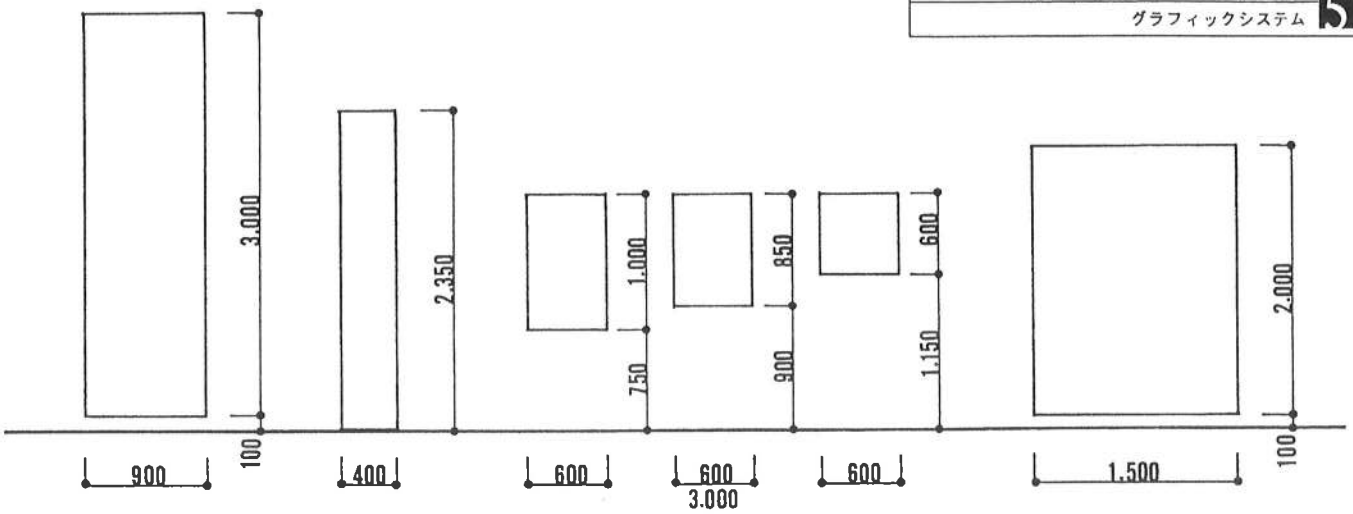
解説計画の考え方 52

博物館の情報解説は、例えば以下のように、さまざまな対象や領域を持っている。

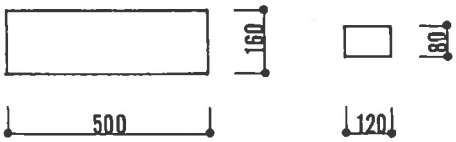
○実物資料等に付属し、資料にまつわる情報を伝えるもの
○時代背景や事象の解説、抽象的な概念等を伝えるもの
○イメージを表現することに重きが置かれ、主として環境づくりに利用されるもの　等

こうした解説の対象や領域によって、情報内容に質的・量的な違いが生じる。これらの情報内容を整理し、いくつかのレベルに振り分け、さらにこれらを明確な目的のもとに寸法、仕様、素材等を規格化じたパネルに落とし込むことで、情報の混乱を避け、的確な情報提供を行うことが可能になる。
当館では、右図のようなヒエラルキーを設定し情報の整理を行うものとする。

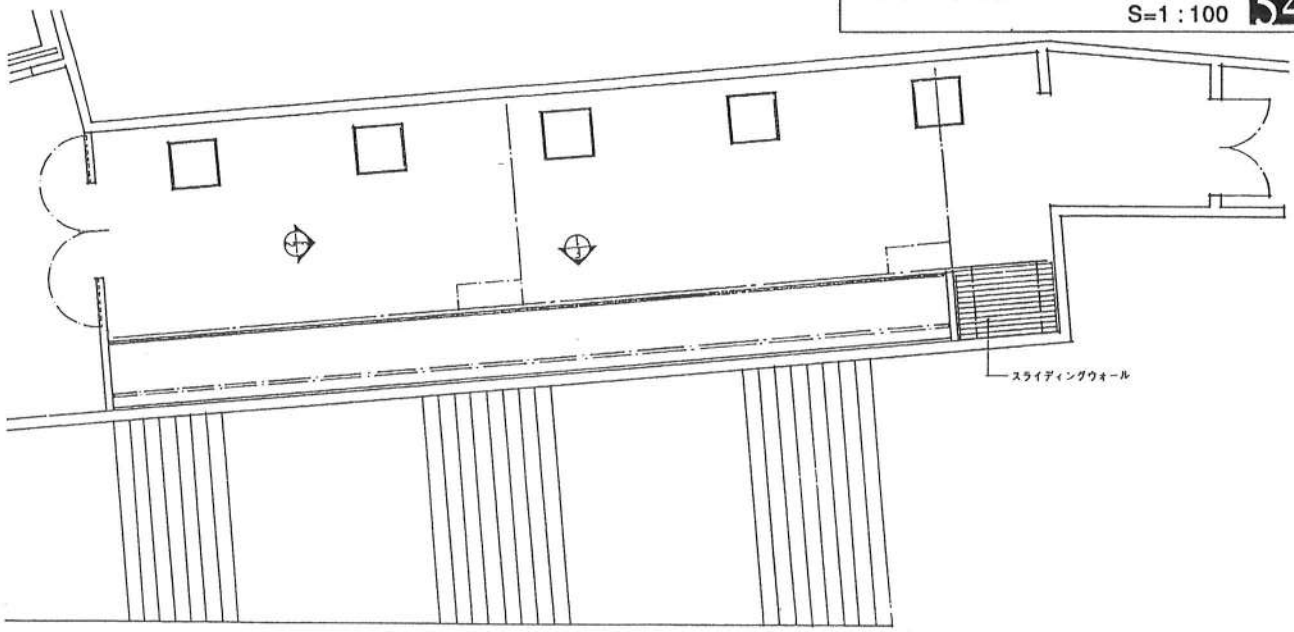


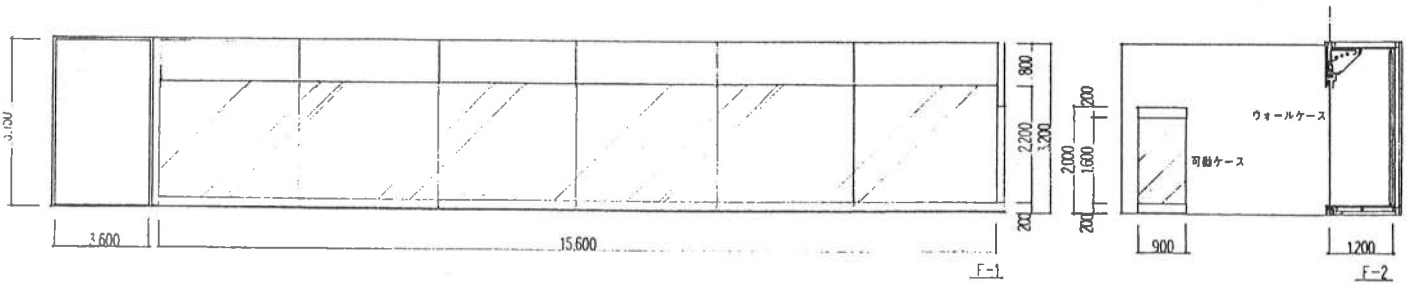


ゾーンパネル　コーナーパネル　解説パネル　環境グラフィック

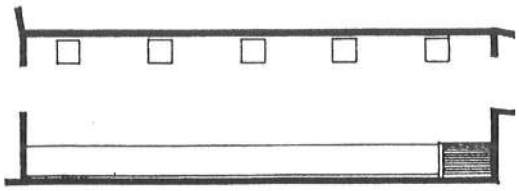


キャプションパネル　ネームプレート

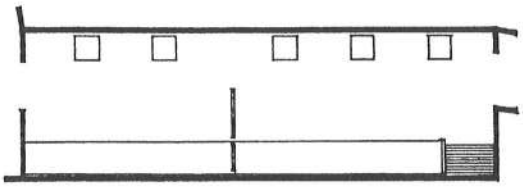




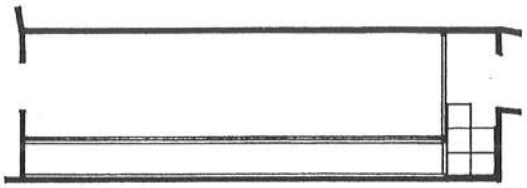
企画展示室のレイアウト例 55



レイアウト例1 ― 企画室を全面使用する
壁付きケースに可動ケース5台を組合せた例。通常の展示をカバーするものとして、企画展示の基本パターンといえる。



レイアウト例2 ― コーナーを分けて使用する
企画展の内容によって、展示室を二つのコーナーに分けて使用することもできる。壁面ケース内に仕切りを設け、スライディングウォールで分離する。



レイアウト例3 ― 講座室など多目的に使用する
企画展示室を講座室などとして転用する場合には、壁面ケースの前面をスライディングウォールで覆い、可動ケースを展示室奥に収納する。スライディングウォール面に簡単な掲示も可能。

博物館における情報システムの必要性 56

博物館の歴史は、モノ中心であった。その昔、特権階級の持ち物であった珍しい品々を一般民衆に公開しようという発想から、博物館はスタートしている。けれども、今日の博物館はただ単にモノを陳列するにとどまらず、そのモノから情報を汲み取ることが、そして、汲み取った情報を効果的に来館者に伝えることが、求められている。

モノから汲み取った情報を整理、管理することは、今日の博物館のごく基本的な任務である。従来は収蔵資料をカード化し、ファイリングすることによって、それが行なわれてきた。しかし、カードでは情報の抽出等はすべて手作業に頼らねばならず、膨大な時間を要することもある。博物館にとって非常に重要な情報の加工、抽出等の作業を、自由にそして、簡単に行なうためには、電子化された情報システムが必要となってくるのである。

更に、学芸員の側で、そのような情報システムを整備すれば、来館者のための展示にも生かすことができる。これまでにも、モノの持つ情報を効果的に伝えるために、またモノとモノの間を埋める情報を知らせるために、パネルや模型、空間復元、映像などの様々な展示手法が工夫されてきたが、近年急速に増えているのが、コンピュータを利用した展示である。インタラクティブ性があるため、来館者それぞれの興味に応じた情報展開ができる、優れた手法であると言える。

また、電子化された情報は、回線を通じて転送することが可能となる。地域の図書館と、文献に関するデータをやり取りするなどのネットワーク展開も考えられる。また、他の焼物を扱う博物館、美術館等と連係した広範囲なネットワークも将来的には可能となり、焼物全般に関する幅広い研究の拠点として整備してゆくことも考えられる。

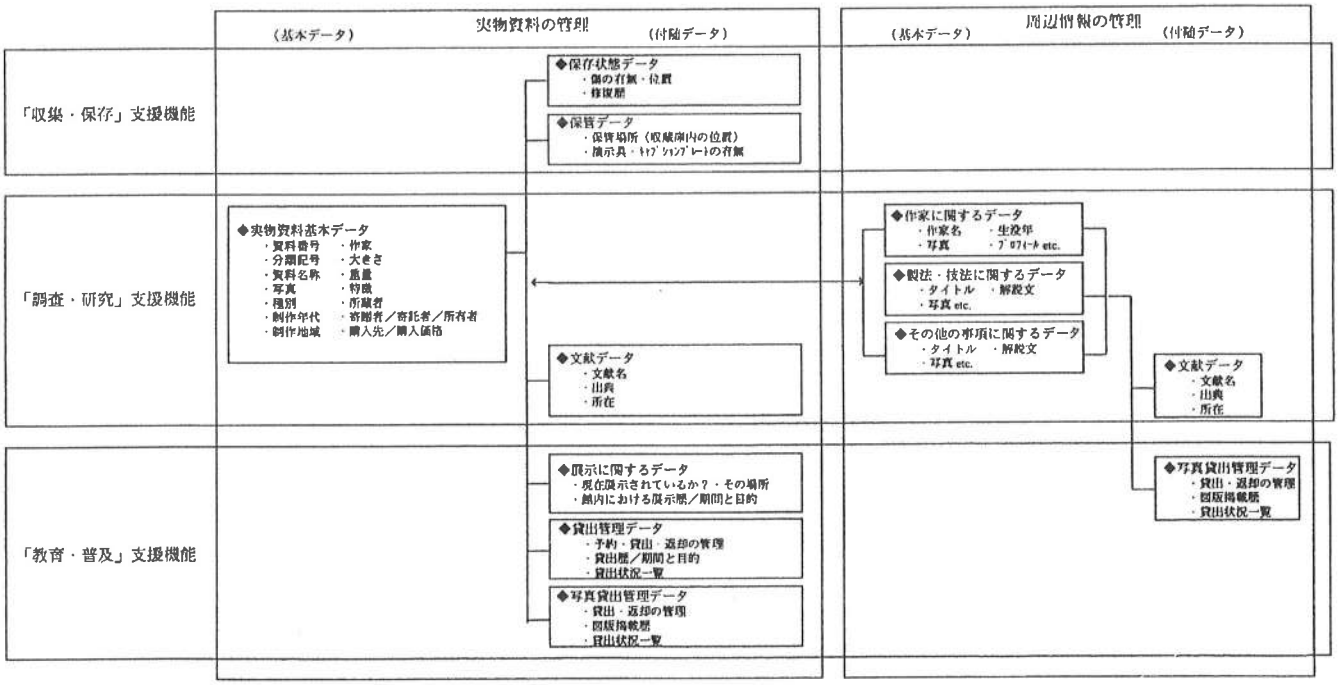
◆収蔵品管理システム

モノに関する情報管理、およびモノの周辺の情報の管理によって、博物館活動を全面的に支援する。<収集・保管><調査・研究><教育・普及>のすべてに渡り、学芸員の作業を大幅に合理化する。また、学芸員用に集積した情報のうちの一部を、展示の一環として来館者に公開する。

◆地域情報提供システム

焼物の窯跡等、館周囲の地域に関する様々な情報を、来館者に提供する。このシステムで情報を入手した来館者は、地域の各所に足を運び、実地において様々な体験学習をすることができる。館を拠点とした学習のフィールドを拡大する。

この収蔵品管理システムには、大きく分けて2つの機能がある。
1つが「実物資料の管理」、つまり焼物・道具等の実物資料に関するデータの管理である。
実物資料は主として本館の収蔵品であるが、本館のテーマに関わる他館の資料もこれに含まれる。
もう1つが実物資料以外の「周辺情報の管理」、本館のテーマに関わる様々な情報の管理である。この2つの機能には、それぞれ“基本データ”と“付随データ”があり、「収集・保存」「調査・研究」「教育・普及」という博物館の3大機能に基づいて整理すると下記のようになる。



収蔵品管理システムの特徴

●使いやすいヒューマンインターフェイス
○コンピュータが苦手な人でも簡単に操作できるように、使いやすいデザインを工夫できる。

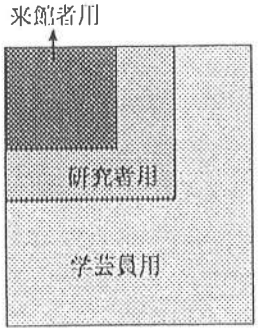
●求める情報をすぐに呼び出せる
○複雑な複合検索も簡単な操作でできる。
○1つの情報から関連する情報へのアクセスがスムーズにできる。

●簡単スピーディーな入力方法
○マウスで選択するだけの入力方法を導入することにより、キー入力の手間を省力化できる。

●自動計測システムとの一体化
○自動計測システムと一体化することにより、実物資料の写真撮影、サイズ測定、重量計測を自動的に行え、作業の合理化を図る。更に、それらのデータをワンタッチ操作でデータベースに入力できる。

●動画や音声も扱える
○資料映像や音声データを、他のデータと一括して管理することも可能であり、来館者により効果的な情報を与えることができる。

●データを効果的に運用できる
○学芸員用のシステムを作ることにより、それを加工して簡単に、来館者用、研究者用ソフトが作れる。



収蔵品管理システムの機能

●実物資料基本データの管理

○資料番号・資料名称などの基本的な情報と、写真画像を一元管理し、検索・変更・追加が簡単に行える。

○資料に関する付随データを簡単に引き出せる。

○資料に関連する周辺情報を引き出せる。

●実物資料付随データの管理

○保存データの管理

・資料の傷の有無、傷の位置、修復歴　等

○保管データの管理

・保管場所

・キャプションプレートや演示具の有無　等

○展示に関するデータの管理

・現在展示中かどうかの表示

・過去の展示歴　等

○貸出の管理

・予約・貸出・返却の状況

・過去の貸出歴　等

○写真貸出の管理

・写真（ポジフィルム）の貸出・返却の状況

・図版掲載歴・貸出歴　等

○文献データの管理

・出典図書、関連図書の名称

・図書資料保管場所　等

●周辺情報の管理

○作家に関する基本データの管理

・作家名、生没年、肖像写真等の作家情報

・関連する実物資料や付随データも引き出せる。

○焼物の製法・技法に関する基本データの管理

・タイトル、解説、作業風景写真等の情報

・関連する実物資料や付随データも引き出せる。

○その他の事項に関する基本データの管理

・タイトル、解説、作業風景写真等の情報

・関連する実物資料や付随データも引き出せる。

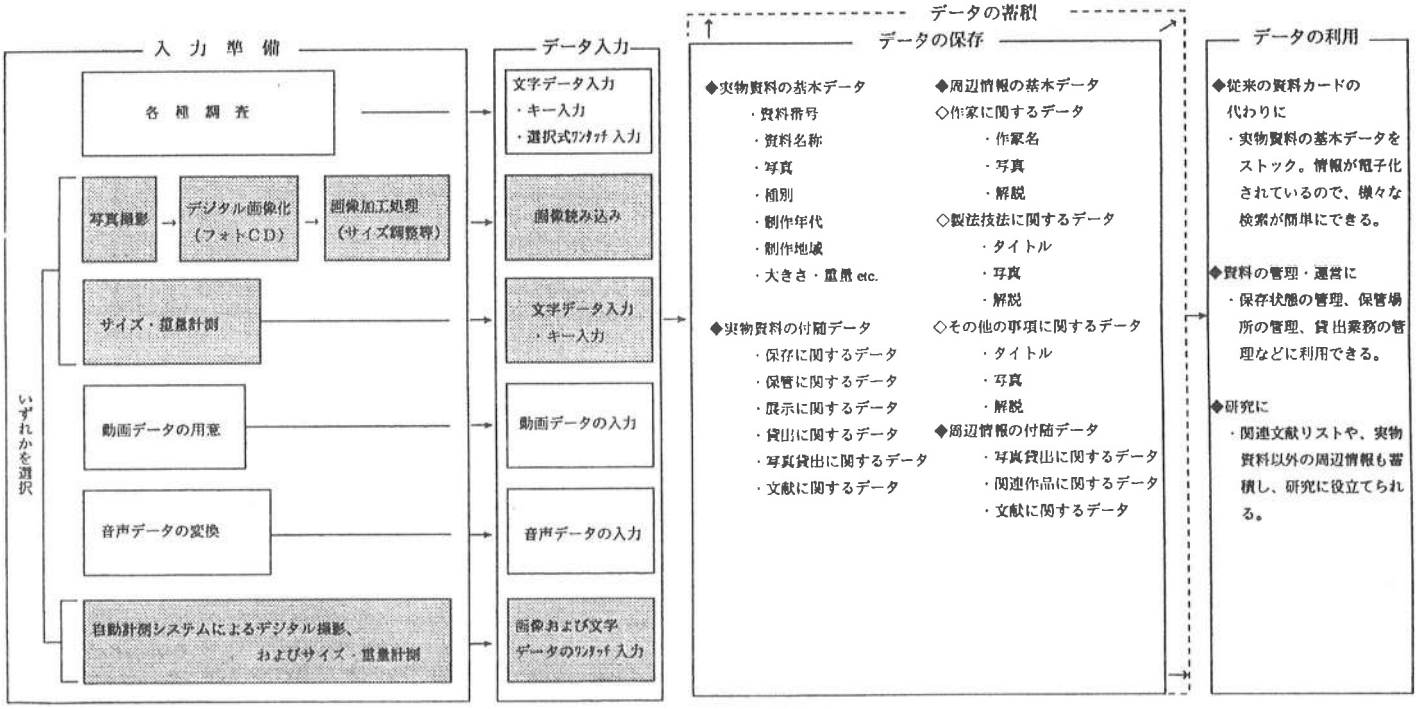
○周辺情報の付随データの管理

・写真資料の管理

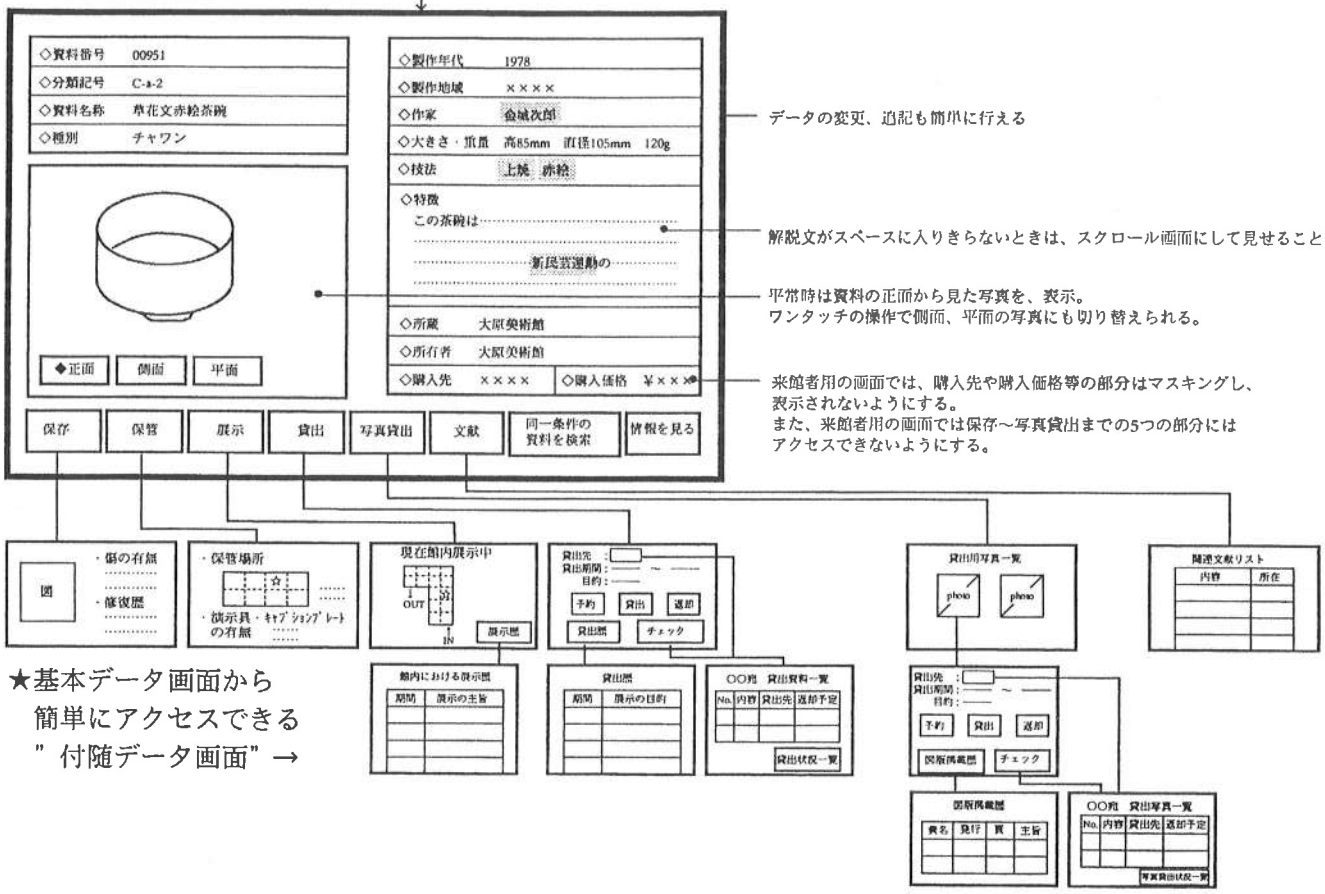
・文献データの管理

●印刷機能

○必要な画面の内容をプリントアウトできる。

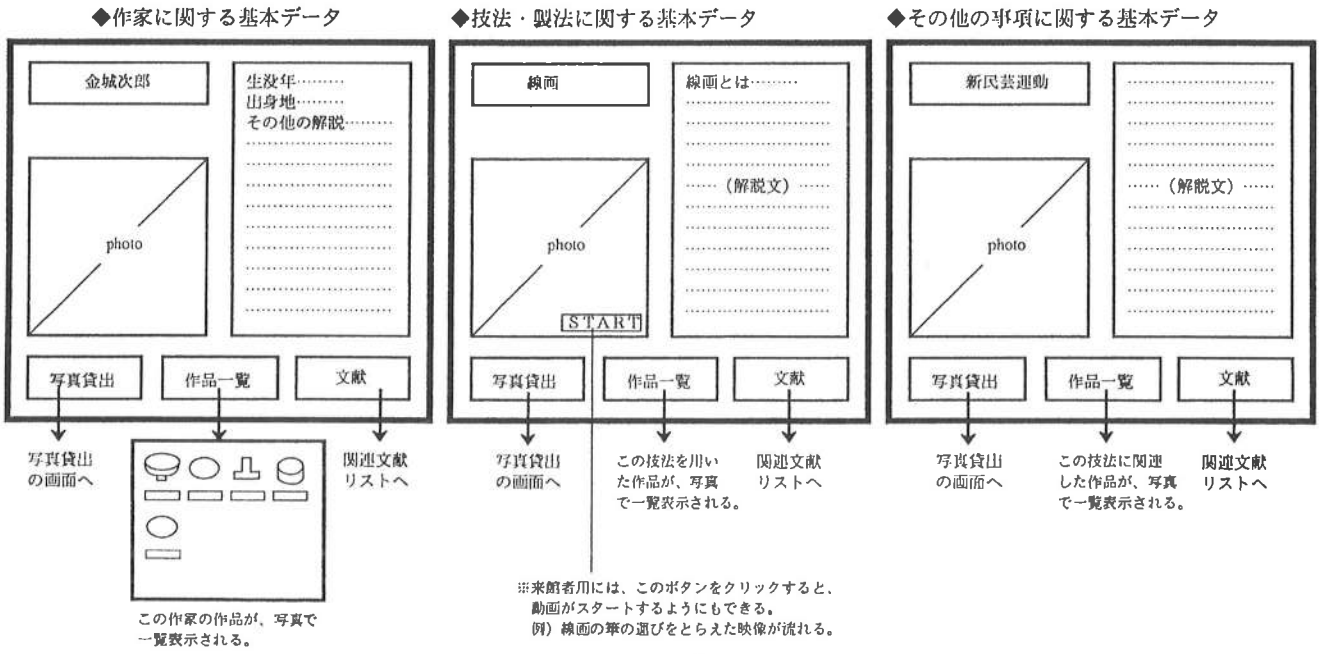


★資料に関する基本的なデータが一目で分かる
"実物資料基本データ画面"



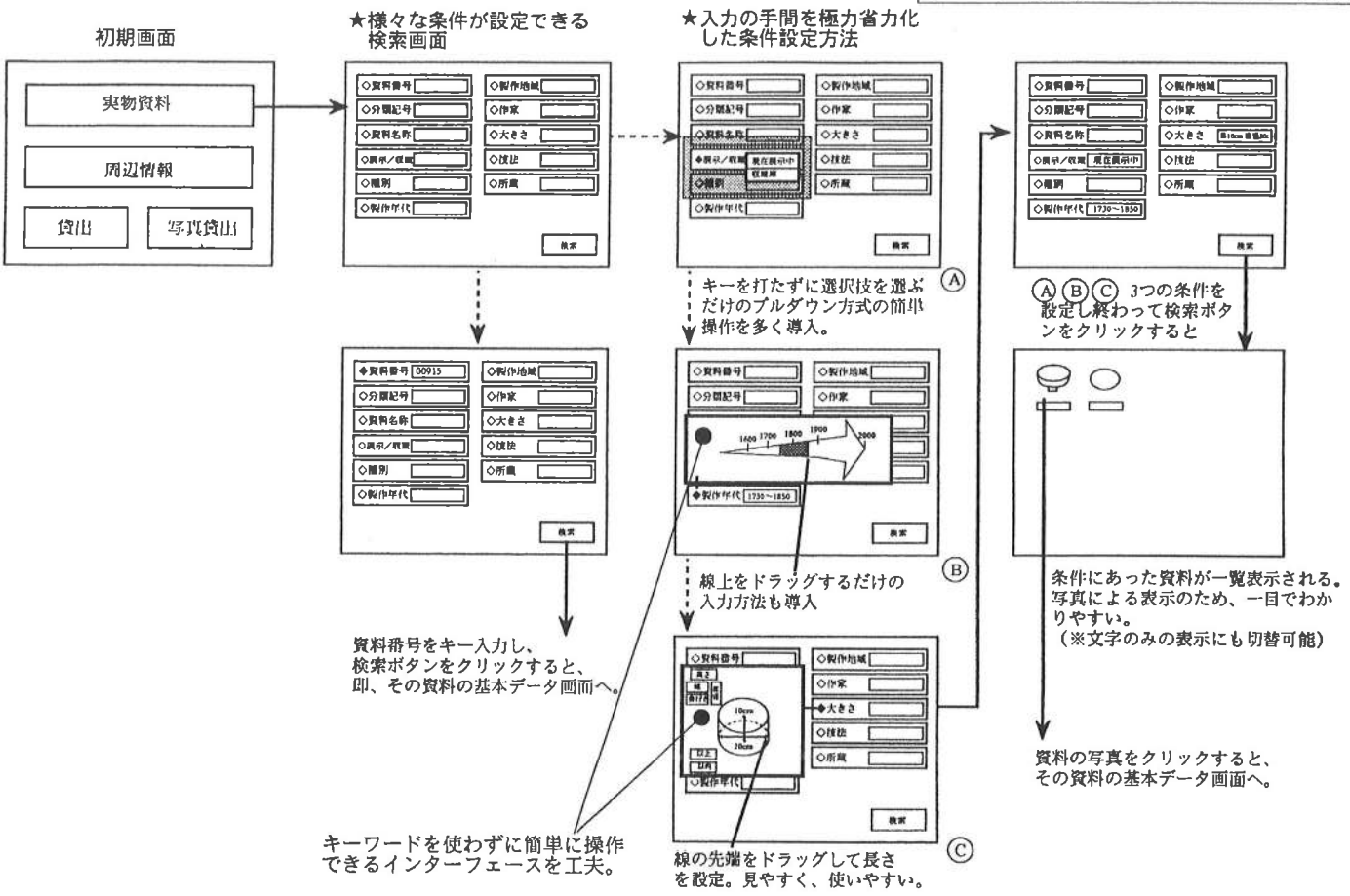
★基本データ画面から
簡単にアクセスできる
"付随データ画面"→

★実物資料以外の情報もデータベースに収録―研究や展示に役立てることができる。
★1つのテーマに関する基本データを一目でわかるように表示。
★必要に応じて動画の扱いも可能。
（来館者向けには、動画と音声を効果的に使えば訴求力は格段にアップする）



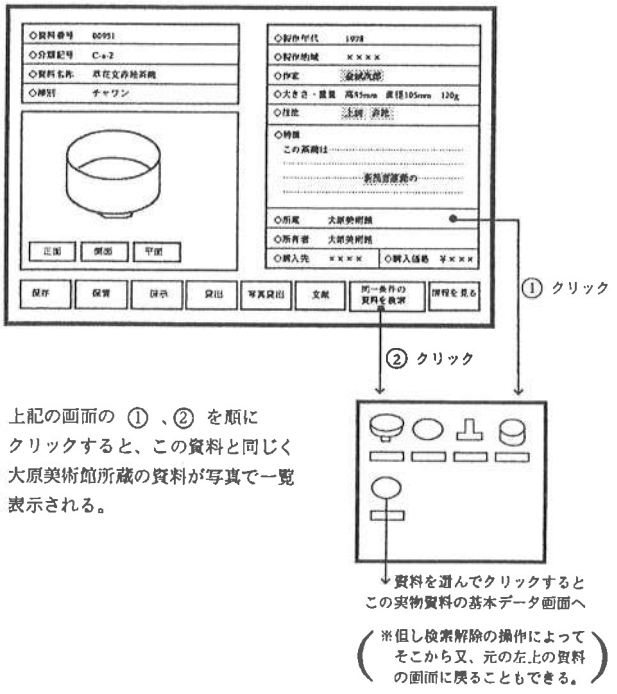
★簡単、便利でわかりやすい複合検索システム―

省力化されたシンプルな操作で高度な研究も容易に

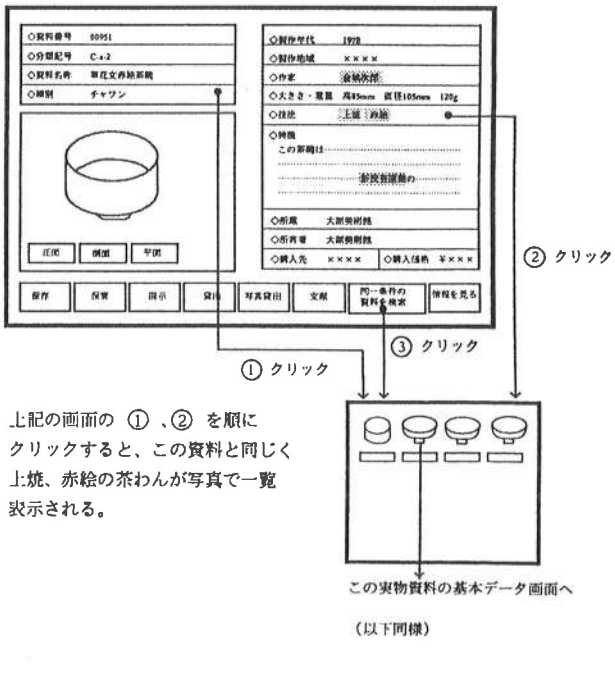


★1つの実物資料から、関連する実物資料へ簡単にアクセス

☆類似する実物資料にすぐにアクセスできる。
だから、興味のおもむくままに、自由に情報をひき出せる。



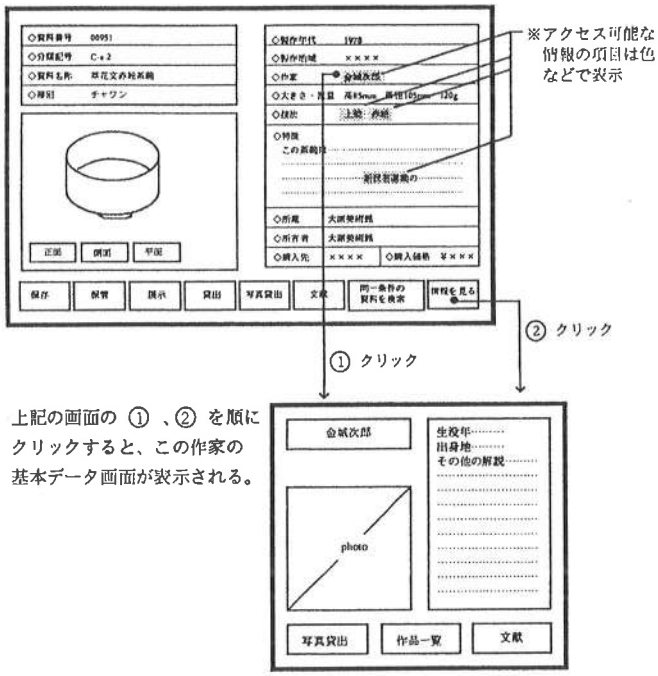
☆複数の条件を設定した絞りこみも可能。
だから、研究や、展示の企画を練る時などに便利。



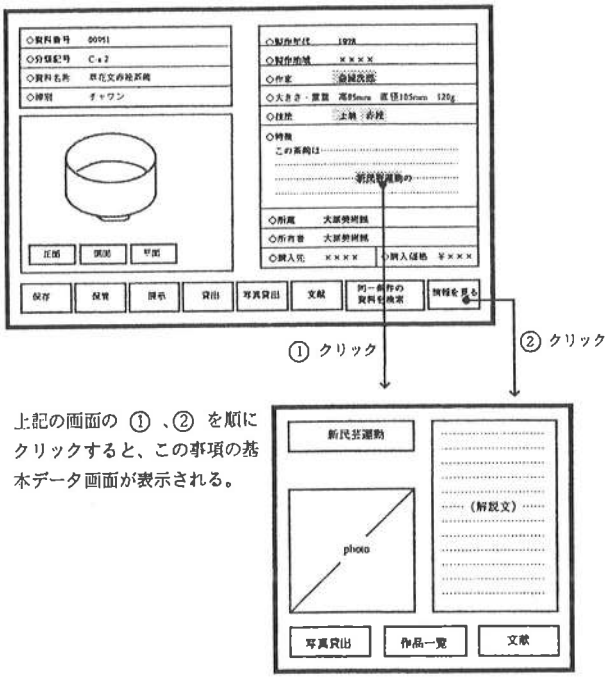
★1つの実物資料から、関連する周辺情報にも、簡単にアクセス

☆資料の作者に関する情報を参照したい時などは、
すぐにその情報がひき出せて便利。

☆解説文の中のキーワードに関する情報も
すぐにひき出せる。（来館者用の場合、
来館者の疑問にすぐ応えられる）

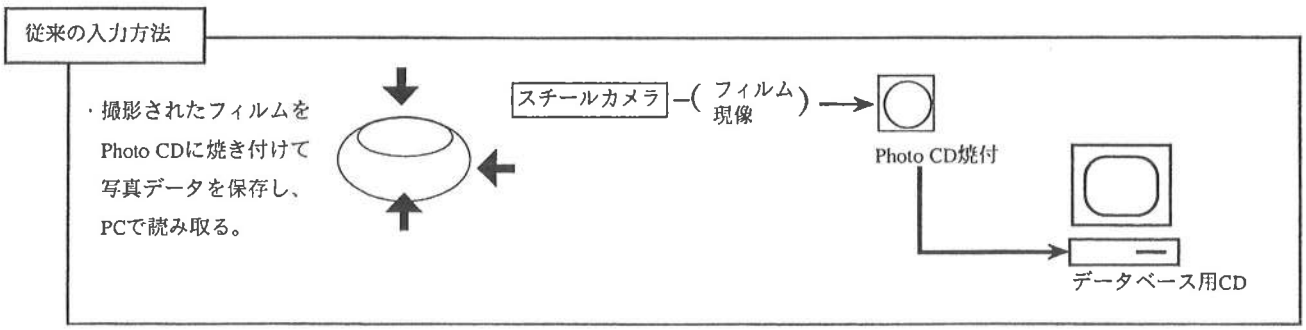


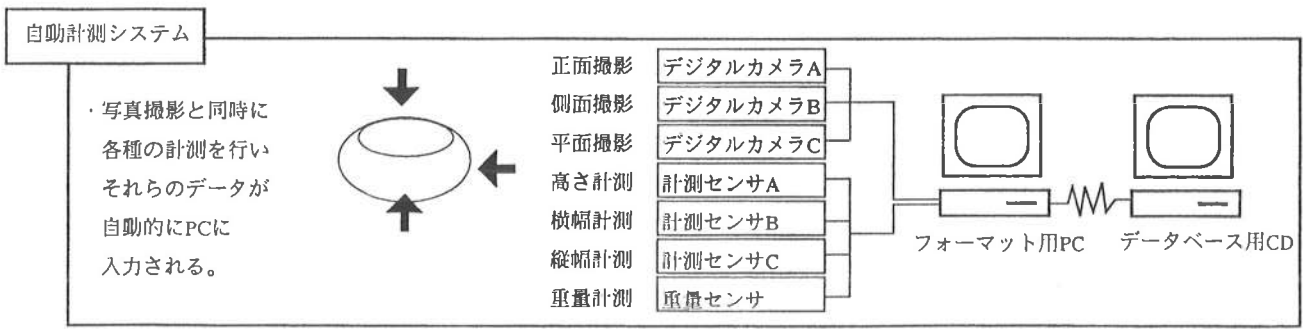
上記の画面の ①、② を順にクリックすると、この作家の基本データ画面が表示される。

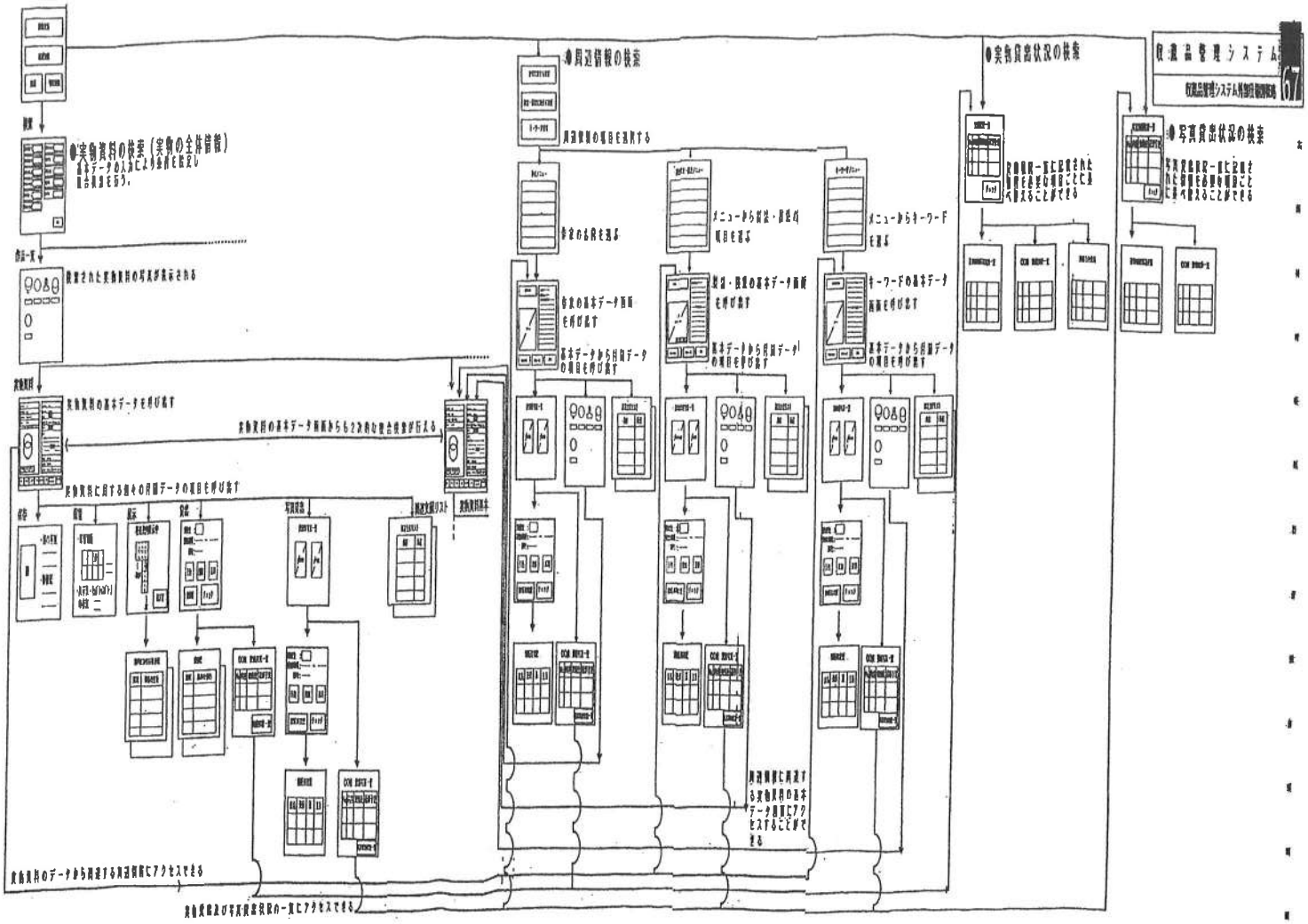


上記の画面の ①、② を順にクリックすると、この事項の基本データ画面が表示される。

◆データベース作成にあたって、写真データの入力はこれまで多くの作業時間を要するものであった。「自動計測システム」は、将来の写真撮影からCD-ROM焼き付け（又はスキャン入力）までの工程を、デジタルデータの処理システムにより自動化し、併せて、様々な計測を一体的に取り行うことができる。







壺屋地区には、焼物の窯跡をはじめ古い石垣等の歴史的文化遺産が数多く存在しており、壺屋地区全体をエコミュージアムと捉えられる。

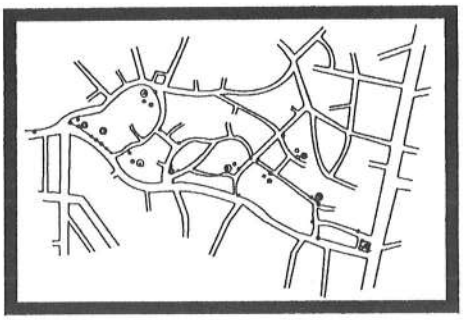
壺屋焼物博物館は、このエコミュージアムの中核施設であり、地区の情報発信基地として位置づけられる。

また、博物館周辺には陶器販売店や飲食店が存在し、これらの商店情報は、観光客や修学旅行生等の団体客が訪れた際に、当館のように小さな博物館の機能を補完していくためには大変重要である。

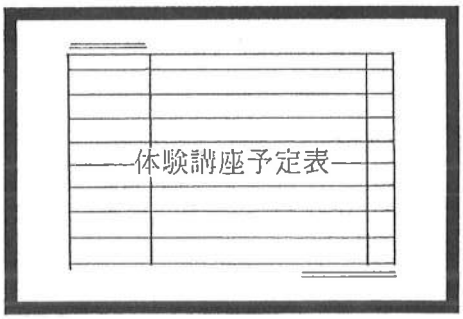
本システムでは、散策ルートに点在する各文化遺産の地理・歴史特性等の様々な情報を、文字・画像（静止画・動画）・音声等のマルチメディアで提供する。

また、壺屋地区内の工房や商店の情報、及び工房等で開催される各種体験講座やイベント等についても紹介していく。

来館者は、博物館内でこのシステムを利用することにより、壺屋地区内のさまざまな情報や、興味のある場所の詳細情報を入手することができる。



■　モニター上に表示される地図上の任意のボタンを押すと、その場所の詳細な情報が提供される。



■　体験講座予定表を見るたい場合は、体験コース選択ボタンを押せば予定表が表示される。

地域情報提供システムの特徴

●使いやすいヒューマンインターフェース
○コンピュータが苦手な人でも簡単に操作出来るように、グラフィックを中心とした視覚的な操作が可能である。

●求める情報を複合情報により入手できる
○壺屋地区の地図から、点在する歴史的文化遺産の位置及び文字・画像・音声の複合情報を入手できる。

●動画も音声も扱える
○資料映像や音声データをテキストデータと同様に扱えるので、焼物の作成過程等を具体的に把握することができる。

●詳細な地域情報を館内で入手できる
○壺屋地区の文化遺産の地理・歴史・特性等が、文字・写真・動画・音声によって詳細に提供できる。

●スタンドアロン型である
○独立した単独のシステムである。

地域情報提供システムの機能

●地図表示機能
○来館者が探している諸地域までの地図とルートを表示・印刷する。

●情報検索機能
○地図から視覚的に必要な壺屋地区内の情報を検索できる。
○項目別選択画面から、各種講座状況など、必要な情報が検索できる。

●焼物の作成過程表示機能
○焼物の作成過程をビデオ・ムービーで具体的に表示できる。

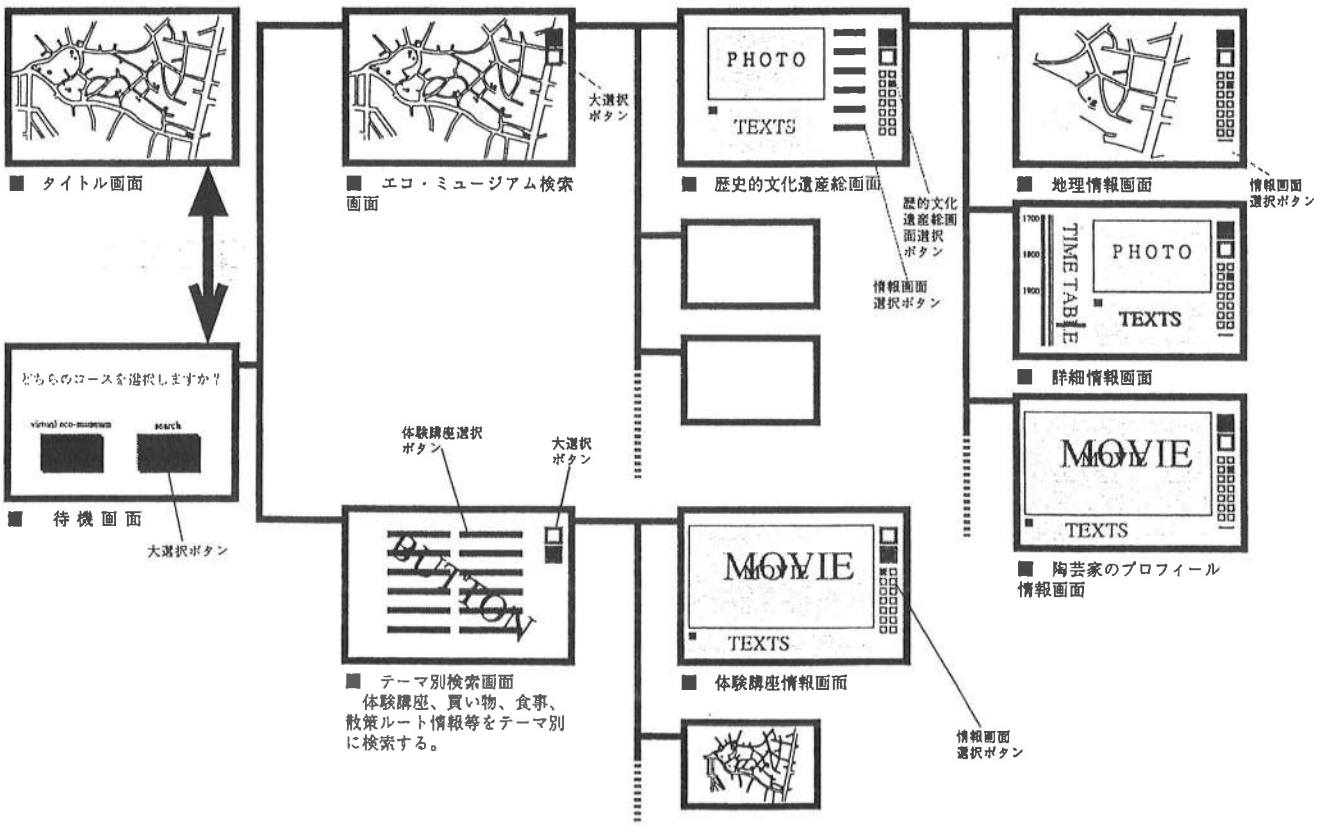
●詳細な情報提供機能
○壺屋地区の文化遺産等の地理的位置
○壺屋地区の文化遺産等の特徴・詳細情報
○壺屋地区在住の陶芸家のプロフィール
○壺屋地区内の商店情報
○各種講座・イベント等の開催状況

●新しい情報の更新機能
○各種講座・イベント等の新しい情報のプログラムを職員が簡単に入力できる。

●ガイダンス機能
○ガイダンスボタンを押すと、操作方法をガイドする。

●印刷機能
○各種情報をプリントアウトできる。

●来館者は、最初の画面において、「エコ・ミュージアム検索画面」と「テーマ別検索画面」のどちらかを選ぶことにより、必要な情報を地図上から検索することも、内容から選んで検索することも可能である。



館内インフォメーションの必要性

館の入口受付付近や図書室入口付近において、館内インフォメーションコーナーを設け、パンフレットやチラシ等が自由に持ち帰れるカウンターや棚等を設置する。その際、ボランティアや職員によるレファレンスサービスを行い、外国人や子ども、身障者にも分かりやすい案内を心掛ける。

館内インフォメーションの内容

●施設案内

○博物館内の展示室・講座室等、来館者が利用する諸室についての位置を案内する。

●企画展示の紹介

○現在開催中および近日開催予定の企画展示の内容について紹介する。

●各種講座等の紹介

○館内において開催される各種講座等の紹介を行う。

●他館の企画展・特別展情報の紹介

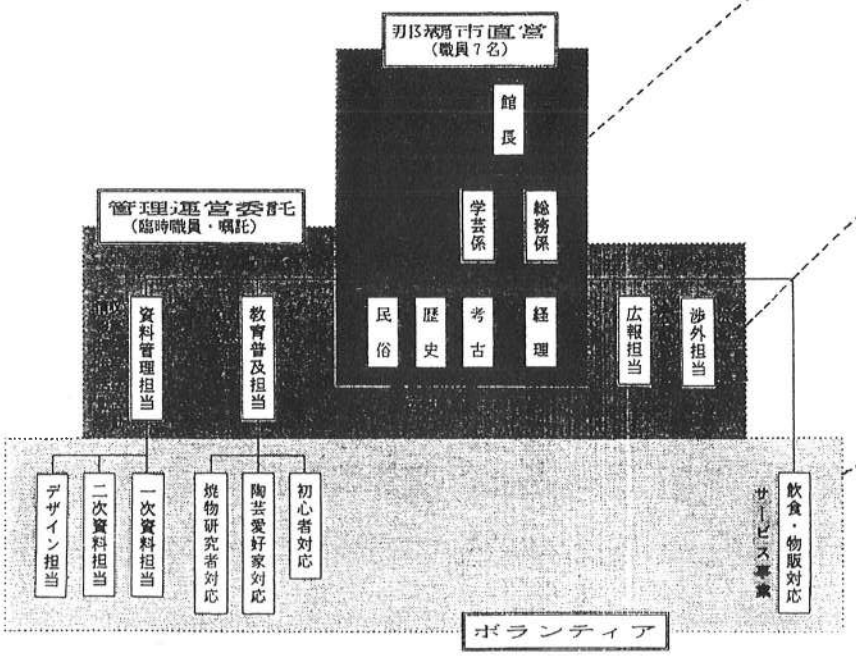
○他館において開催される企画展・特別展についてポスター・パンフレット・チラシ等を置き、紹介する。

●那覇市内の観光情報の提供

○那覇市内において開催されるイベントや、市内の観光地に関する情報を提供する。

運営形態と組織体制 72

壺屋焼物博物館では、最小限の組織を市直営で管理し、館の基本的な機能を果たすために臨時職員や嘱託による管理委託運営を行います。
また、ボランティア等の人材を活用することによって、各機能の専門性と活動の充実に努めます。



・学芸課が、研究テーマによって組織分けされており、それぞれのテーマ担当者ごとに調査研究・収集保存・教育普及活動を行う体制となっているため、各担当者が抱える負担が大きく、機能面での専門性が発揮しにくい。
・博物館の機能を重視して、学芸員の配置を調査研究・資料管理・教育普及の3つの分野で配置することも考えられる。

・博物館の基本的な機能としての教育普及係・資料管理係、また広報係や渉外係にそれぞれ専門の人材を配置することで、各活動ごとの充実を図れる。

・壺屋地区の陶芸作家や、館の講座等で学んだ人々に、教育普及・資料管理・サービス活動へ参加してもらうことにより、地域と一体化した館の活動を目指す。

実施設計作業を進めていく上で、また、オープンへ向けて考慮すべき留意点を以下に掲げる。

●展示資料、及び展示情報の確定

展示基本設計に当たっては、検討委員会の助言を得て、展示の主題と構成、全体のストーリーラインについての確認をいただいた。これを受けて実施設計では、具体的に展示資料を特定し、解説その他展示情報の詳細を確定し、展示方法を決定していく作業が必要となる。この段階で、実物資料だけでなく、映像や写真等、情報ソフトの所在確認を行い、実施設計上での取扱いを決定する。また、時代の中の壺屋焼（ミニジオラマ）については、それぞれの題材について、実施設計段階で十分検討し決定していくものとする。

●準備室の設置－専門職員の配置が望まれる

実施設計段階では、上記のような展示資料の確認・収集・整理・保管、伝達すべき情報の内容の最終的な確認や情報システムの構築など展示情報の分析整理、展示を実現していくための各方面への協力要請など、具体的で多様な作業が必要となってくる。このため、可能な限り早期に、必要な職員を配した準備室の設置が必要となる。

この場合、上記のような業務を推進し、博物館の機能を十分に発揮し、また、開館後も博物館の活動が活き活きと保たれていくためには、専門的知識・経験を持つ学芸員を採用し、意欲的な活動を推進していくことが必要といえよう。

●資料収集委員会の設置－早期の資料収集着手が必要

博物館の生命は、価値ある資料の集積にある。資料の収集方針を策定し、保存用、展示用、事業用、研究用など関連資料を計画的・継続的に収集していくために、専門的な立場から助言し、計画を推進する専門の収集委員会を設け資料の審査を行っていくことが望まれる。特に、当館では、開館までの時間的余裕が少ない中で資料を収集し、展示資料を決定していかなければならない。このため、基礎となる資料調査を進め、できる限り早期に収集計画に着手することが必要である。

●地域への協力要請－『私達の博物館』の自覚を醸成する

地域との連携を念頭に置く当館では、展示や事業活動、また資料の収集等への地域の協力、参加を積極的に要請していくことも重要と思われる。展示については、直接的には、焼物の工程撮影やサンプル製作への協力、展示品の寄贈寄託等の呼びかけなどに加え、展示什器や環境づくりのためのしつらい、サインプレートなど展示関係品への陶器その他沖縄の工芸品の手法の活用と製作協力などが考えられる。また、事業活動におけるボランティアとしての協力要請も重要である。

このように、博物館建設時から、地域の人々が博物館づくりに積極的に協力し参画できる仕組みを用意していくことは、ひいては住民一人一人に「壺屋焼物博物館は自分たちの博物館だ」という自覚を醸成していくことにもつながる。開館へ向けて積極的な協力の輪を広げ、地域の人々とのつながりを深めていくことは、今後の博物館活動の持続においても重要な要素であると考えられる。

●定期的な展示の改装を念頭に－常に新鮮な博物館を目指して

展示は施工の完了によって全てが終了するというわけではない。開館後の新資料の入手、調査研究の蓄積など、博物館活動の進展に伴って新たな展示を展開していく必要が生じる。

特に、壺屋焼及び沖縄の焼物に関しては、基本設計段階でも、東京の仙台藩邸跡から壺屋焼が発掘されるなど、今後も各分野での研究の成果が期待されるところである。

また、展示手法や展示装置の老朽化についても、一定の期間を経て見直していくことが必要となる。

このように、博物館が常に新鮮な情報を発信し、来館者を引きつける魅力的にあふれているためには、各種の活動を活発に展開していくことが必要であり、その一環として、展示も少なくとも10年単位で見直し、リニュアルしていくことを念頭に置くものとする。